

鳴巣コミュニティセンター・幼稚園等複合施設建設事業に伴う

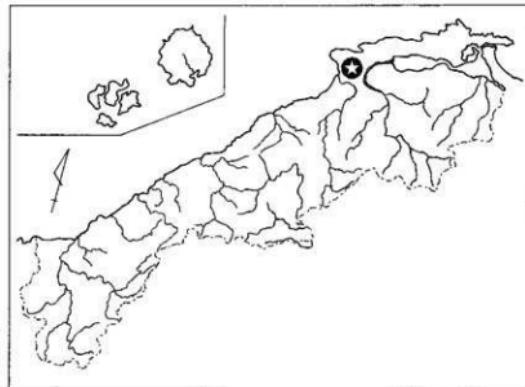
# 門前遺跡発掘調査報告書

2006年9月

出雲市土地開発公社  
出雲市教育委員会

鳶巣コミュニティセンター・幼稚園等複合施設建設事業に伴う

# 門前遺跡発掘調査報告書



出雲市の位置

2006年9月

出雲市土地開発公社  
出雲市教育委員会

## 序

出雲市教育委員会では、今年度、出雲市土地開発公社から委託を受け、鳶巣コミュニティセンター・幼稚園等複合施設建設事業地内に所在する門前遺跡の発掘調査を実施しました。

調査を実施した鳶巣地区は、出雲市内でも文化財の多い地域の一つであります。大寺古墳や鳶ヶ巣城跡の出雲市指定史跡のほか、万福寺には重要文化財に指定されている仏像群があり、地方では特筆すべきものと言えます。また、近年の発掘調査によって青木遺跡からは4基の四隅突出型墳丘墓や奈良・平安時代の多量の墨書き土器とともに神社跡と目される掘立柱建物跡、山持遺跡からは玉作りが行なわれていたことを示す碧玉や緑色凝灰岩の原石や勾玉・管玉・小玉が出土するなど、現在、出雲市内では最も注目を集める地域と言えます。

門前遺跡は、本事業の試掘調査によって新たに発見された遺跡ですが、発掘調査を実施した結果、北部出雲平野沿いの丘陵下における一つの特徴である弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡であることが判明し、当該期における人々の生活の様子を探るうえでも貴重な資料となりました。本書はその報告書ですが、出雲の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたりご理解とご協力を賜りました地元のみなさまをはじめ、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

平成18年9月

出雲市教育委員会

教育長 黒目俊策

## 例　　言

1. 本書は、鳴尾コミュニティセンター・幼稚園等複合施設建設事業に伴い、出雲市教育委員会が平成17年度に実施した門前遺跡発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成17年（2005）6月6日～11月7日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市東林木町890-4ほか2筆

4. 調査は、次の組織で行った。

平成17年度

〔調査指導者〕西尾克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、原田敏照（同 文化財保護主事）

〔事務局〕神門 勉（出雲市文化財課課長）、川上 稔（同 主査）

〔調査員〕岸 道三（出雲市文化財課副主幹）、曾田辰雄（同 主任）、神門敦子（同 臨時職員）

平成18年度＜報告書作成＞

〔事務局〕石飛幸治（出雲市文化財課課長）、花谷 浩（同 学芸調整官）、川上 稔（同 主査）

〔調査員〕景山真二（同 主任）、曾田辰雄（同 主事）、遠藤正樹（同 主事）

坂根健説（同 嘴託員）、勝部真紀・高橋亜紀・櫻井康行・高橋誠二（以上 同 臨時職員）

5. 本書で使用した方位は真北を示す。

6. 遺跡の出土遺物及び実測図、写真是出雲市教育委員会で保管している。

7. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸、景山、曾田、遠藤、坂根、勝部、高橋亜、櫻井、高橋誠が行った。

8. 本書の執筆、編集は、岸、景山、曾田、遠藤が行った。

9. 調査にあたっては、地元の方々から多大な協力を得た。記して謝意を表します。

10. 土質分析については、文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳 氏から玉稿を賜った。

11. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

高橋義政 建部陽子 中間盛夫 佐藤倭和子 勝田光久 高根 豊 黒田一三子  
塚原立之 稲村玉枝 高橋イキコ 岡元義文 高橋美夫 妹尾 裕 金森光雄  
渡部政義

12. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

中島和恵 勝部真紀 布野ひとみ 速藤恭子 永田節子 飯國陽子

## 本文目次

カラー図版

序

例言

本文目次

挿図目次

I. 調査に至る経緯.....	1
II. 位置と環境.....	2
III. 門前遺跡の発掘調査	
1. 発掘調査の概要.....	6
2. 造構と遺物.....	16
付録. 門前遺跡発掘調査に係る花粉分析.....	50
図版.....	図版1 ~ 図版18

## 挿 図 目 次

### I. 調査に至る経緯

第1図 発掘調査区位圖	1
第2図 試掘トレンチ堆積土層図	2
第3図 試掘トレンチ出土遺物	2

### II. 位置と環境

第4図 出雲市内の主要遺跡	4
第5図 門前遺跡周辺の遺跡	6

### III. 門前遺跡の発掘調査

第6図 門前遺跡構配図(1)	9~10
第7図 門前遺跡構配図(2)	11~12
第8図 A-A' B-B'堆積土層図	13
第9図 C-C' D-D' E-E' F-F'堆積土層図	14
第10図 G-G' H-H'堆積土層図	15
第11図 布掘建物跡実測図	16
第12図 布掘建物跡(B7Gr SK03 C7Gr SK01)出土遺物	17
第13図 A7 A8 B8Gr SD01実測図	18
第14図 B4Gr SK01実測図	19
第15図 B4Gr SK02実測図	19
第16図 B6Gr SK01実測図	20
第17図 B7Gr SK01実測図	20
第18図 B7Gr SK02実測図	21
第19図 B8Gr SK01実測図	21
第20図 C5Gr SK01実測図	22
第21図 C6Gr SK01実測図	22
第22図 C6Gr SK02実測図	23
第23図 ピット遺構図	24
第24図 C4Gr SX01実測図	26
第25図 C7Gr SX02出土遺物	27
第26図 A1・2・3Gr出土遺物	28
第27図 A3・4・5Gr出土遺物	30
第28図 A5・6Gr出土遺物	31
第29図 A6・7Gr出土遺物	32

第30図 A 7・8 Gr出土遺物	34
第31図 A 8 Gr出土遺物①	35
第32図 A 8 Gr出土遺物②	36
第33図 BGr出土遺物①	37
第34図 BGr出土遺物②	38
第35図 CGr出土遺物①	39
第36図 CGr出土遺物②	40
第37図 CGr出土遺物③	41
第38図 E・F・G Gr出土遺物	42
第39図 褐色粘質土 出土遺物①	43
第40図 褐色粘質土 出土遺物②	44
第41図 褐色粘質土 出土遺物③	45
第42図 褐色粘質土 出土遺物④	46
第43図 褐色粘質土 出土遺物⑤	49
第44図 その他の出土遺物	49

## I. 調査に至る経緯

平成16年(2004)11月24日、出雲市政策課より鳴尾コミュニティセンター・幼稚園等複合施設建設事業地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は周知の遺跡としては知られていないかったものの、東には出雲市指定史跡である大寺古墳や最近の発掘調査によって弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての大複合集落として知られる青木遺跡、南には弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落跡として知られる山持遺跡など遺跡が密集している位置環境から、試掘調査によって遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は、同年12月10日に3ヶ所のトレンチを設定して実施した(第1図)。その結果、南側に設定した第1トレンチでは遺構・遺物とも確認されなかつたが、北側に設定した第2・第3トレンチからは弥生時代終末期の遺物が確認された。このことから、遺跡としては第2・第3トレンチ以北に広がりをもつものと判断した。

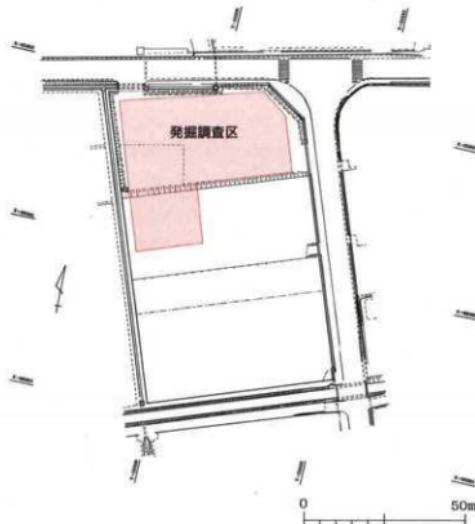
各トレンチにおける堆積土の状況を第2図に示しているが、第2・第3トレンチでは水田下約2.6mの層位に黒褐色土が堆積して遺物包含層となっている。なお、第3トレンチでは黒褐色土の下層に灰色粘砂が堆積し、基盤層となっている。

第2トレンチから出土した遺物を第3図に示している。

第3図1~4は、第2トレンチから出土した遺物である。1、2は壺である。1は上部が欠損しているが、複合口縁で、外面は擬凹線と波頂間の広い波状文、内面はケズリによる調整が行われている。2は複合口縁の稜はやや下方に向き、口縁端部はやや外反して丸く仕上げている。口縁部は外面とともにナデ、頸部下外面は擬凹線と波頂間の広い波状文、ハケ、内面はケズリによる調整が行われている。3は、高壺の壺部である。体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反して丸く仕上げている。外面は縦方向のハケ、内面は縦方向のミガキによる調整が行われている。4は鼓形器台の受部であろう。外面はナデ、内面はミガキによる調整が行われている。いずれも壺の形状から推察すれば草田編年5期頃に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期の資料であろう。

試掘調査の結果から、出雲市政課と出雲市教育委員会で協議を重ね、事業予定地内の北側約834m<sup>2</sup>を発掘調査対象とし、平成17年(2005)6月から出雲市教育委員会が調査を開始することで合意した。

発掘調査に至る手続きとしては、新発見遺跡であったことから試掘調査を実施した出雲市教育委員会



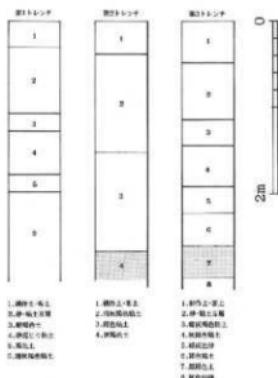
第1図 発掘調査区位置図

から平成17年（2005）3月28日付で遺跡発見の通知（文化財保護法第57条の6第1項）を島根県教育委員会宛提出し、遺跡名を門善谷遺跡と命名した。また、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第99条第1項）を同年4月6日付で島根県教育委員会に提出している。

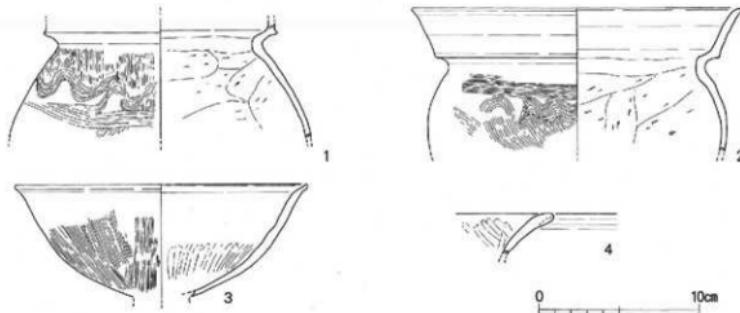
発掘調査は平成17年（2005）4月から準備を進め、6月6日から開始した。遺物包含層が水田面から約3m下と深いうえ、湧水もひどく思うように作業が進まなかつたものの、同年11月7日に調査を終了し、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。なお、調査中に調査地が門善谷と別の谷であることが判明した。調査の結果、本来の門善谷を含む広範囲に遺跡の広がりが想定され、付近が鳩ヶ巣城の門前として栄えたと考えられるところから門前遺跡と改名した。

#### 註

（1）「南講武草田遺跡」 鹿島町教育委員会 1992年



第2図 試掘トレンチ堆積土層図



第3図 試掘トレンチ出土遺物

## II. 位置と環境

### （1）遺跡の位置（第4図）

門前遺跡は、山陰屈指の規模を有する出雲平野の北東部、北山丘陵下の出雲市東林木町に所在している。一畑電鉄川跡駅から北に1kmほど離れた地域で、のどかな田園風景が広がっている。

遺跡の現況はほとんどが水田として利用され、北山丘陵下を東西に走る国道431号線沿い及び多数所在する谷部に古くからの集落が形成されている。

門前遺跡が所在する周辺には、北東に出雲市指定史跡で、古墳時代前期後半に築造された大寺古墳、

東には四隅突出型墳丘墓4基のほか奈良・平安時代にかけての多量の墨書き器や木簡とともに神社跡と目される建物跡が検出され、大複合集落として知られる青木遺跡、南西には弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての集落跡として知られ、玉作りが行なわれていた山持遺跡が所在している。また、北方の北山尾根上には戦国時代に毛利元就が尼子征伐のために出雲の国に進入して初めて設けた軍事拠点である鳶ヶ巣城が築造されている。

## (2) 歴史的環境

出雲平野を取りまく地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して人海のような状況を呈していた神門水海（現在の神西湖）に注いでいたようである。

このような地形のもと、門前遺跡は斐伊川が北山に最も接近し、西流する地点に程近い出雲平野北部丘陵下に立地していたと考えられ、少なくとも鎌倉時代の初期頃までは同様な景観であったと考えられる。また、四隅突出型墳丘墓や大寺古墳の存在からこの地域を治めた有力者の存在が推察され、これら墳墓の被葬者を支える墓盤として青木遺跡や山持遺跡の存在が考えられる。

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある斐根遺跡、西の砂丘下にある上長浜遺跡が知られており、縄文時代早期の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前中期から中期にかけての上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原川遺跡が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷I遺跡、平野中央部の矢野遺跡・蔵小路西遺跡などからも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡、姫原西遺跡や三部竹崎遺跡などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など集落を囲繞する環濠を有する大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。

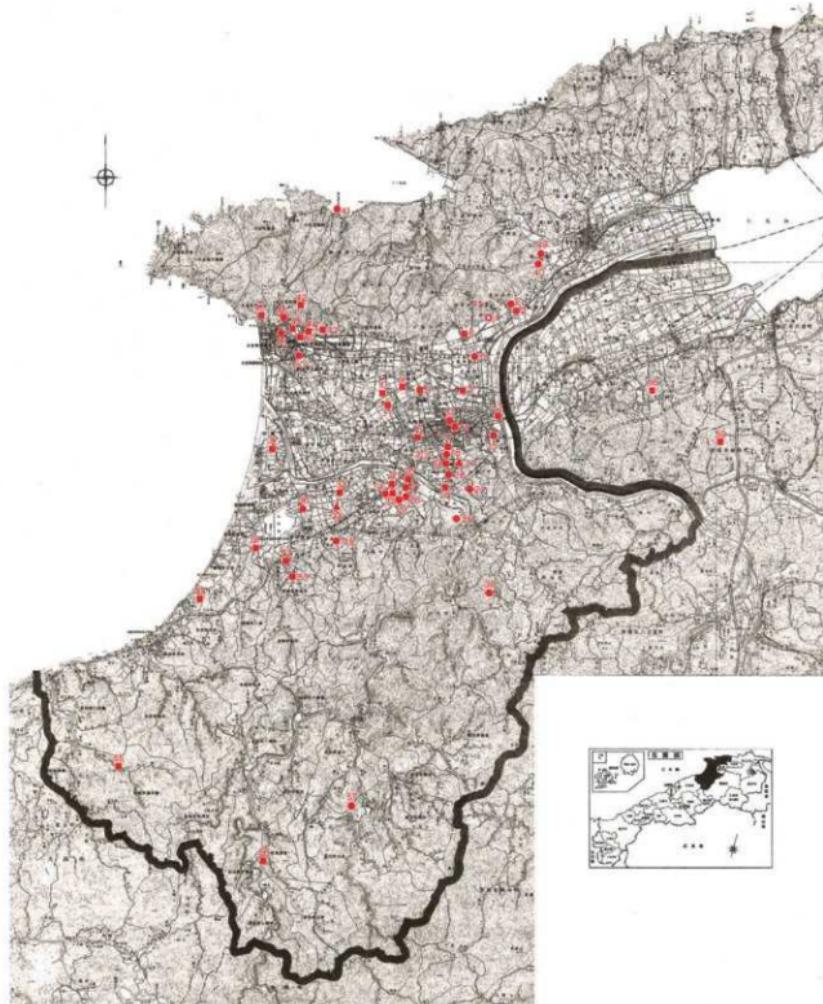
また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60mもある3号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。そして、近年の発掘調査によって、平野部の中野美保遺跡や青木遺跡からも四隅突出型墳丘墓が相次いで発見され、集落と墓域の関係などを考えるうえで注目されている。

古墳時代中期には、斐伊川左岸の南部丘陵地には三谷遺跡や長廻遺跡が所在し、土壙や竪穴式住居跡などが確認され、神戸川右岸の南部丘陵地にも三田谷I遺跡から多量の遺物とともに竪穴住居跡などが確認されている。一方平野部では、これまで天神遺跡や古志本郷遺跡などで少量の遺物が出土している程度であった。しかし、近年の発掘調査によって四隅突出型墳丘墓が発見された中野美保遺跡や中野西遺跡からは土壙などの遺構とともに古墳時代中期の遺物が確認されている。また、山持遺跡でも古墳時代前期から中期にかけての掘立柱建物跡や玉作りが行なわれていたことを示す勾玉や管玉などが出土している。いずれも当時は西流していた斐伊川の旧自然堤防上に立地していたものと考えられ、平野部においても当該期の人々のくらしが明らかになりつつある。

また、当該期の古墳としては、北山山脈に大寺古墳や上島古墳が築造される他、神門水海に近い南

部丘陵地には北光寺古墳、県内では類例の少ない筒型銅器を副葬し、内海航路を押さえた首長の墓と目される山地古墳などが築造される。

古墳時代後期後半には、今市大念寺古墳・上塩治築山古墳・地蔵山古墳・中村1号墳など、横穴式石室を有す大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塩治横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認



第4図 出雲平野の主要遺跡 ( $S = 1 : 200,000$ )

出雲平野周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な種別	No.	遺跡名	主な種別
1	門前遺跡	散布地	31	宝塚古墳	古墳
2	大寺古墳	古墳	32	田畠遺跡	集落跡
3	青木遺跡	集落跡	33	知井宮多聞院遺跡	貝塚
4	蔵ヶ巣城跡	城跡	34	神門横穴墓群	横穴墓
5	山持遺跡	集落跡	35	北光寺古墳	古墳
6	荻杼古墓	古墓	36	山地古墳	古墳
7	中野美保遺跡	集落跡	37	上長浜貝塚	貝塚
8	小山遺跡	集落跡	38	土標烽跡	烽跡
9	矢野遺跡	集落跡	39	中村1号墳	古墳
10	井原遺跡	散布地	40	上島古墳	古墳
11	白枝荒神遺跡	散布地	41	猪目洞窟遺跡	洞窟
12	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	42	真名井遺跡	銅戈出土地
13	塚山古墳	古墳	43	菱根遺跡	散布地
14	今市大念寺古墳	古墳	44	修理免本郷遺跡	散布地
15	西谷墳墓群	墳墓・古墳	45	五反配遺跡	水田跡
16	天神遺跡	集落跡	46	出雲大社境内遺跡	神社跡
17	宮松遺跡	集落跡	47	奉納山経塚	経塚
18	上塩冶築山古墳	古墳	48	鹿藏山遺跡	館跡
19	築山遺跡	古墳	49	原山遺跡	散布地
20	神門寺境内庵寺	寺院跡	50	南原遺跡	散布地
21	上塩冶横穴墓群	横穴墓	51	西安原遺跡	集落跡
22	上塩冶地藏山古墳	古墳	52	御領田遺跡	集落跡
23	三田谷I遺跡	集落跡	53	三部竹崎遺跡	散布地
24	光明寺3号墓	古墓	54	雲州久邑長沢焼窯跡	窯跡
25	小坂古墳	古墳	55	宮本鍛冶山内遺跡	製鉄遺跡
26	古志本郷遺跡	集落跡	56	朝日たら跡	たら跡
27	大梶古墳	古墳	57	八幡古墳	古墳
28	放レ山古墳	古墳	58	荒神谷遺跡	青銅器埋納地
29	妙蓮寺山古墳	古墳	59	加茂岩倉遺跡	青銅器埋納地
30	下古志遺跡	集落跡			

されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、古志本郷遺跡では郡庁跡と目される大型建物跡が検出され、門前遺跡に隣接する青木遺跡からは奈良・平安時代の神社跡と目される建物跡とともに大量の墨書き、ヘラ描き土器が検出されている。一方、この時期になると神門寺境内庵寺・長者原庵寺など私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墳、皆沢古墳のほか、近年の発掘調査によって、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、古墳から火葬墓への過渡期の様子が明らかになりつつある。

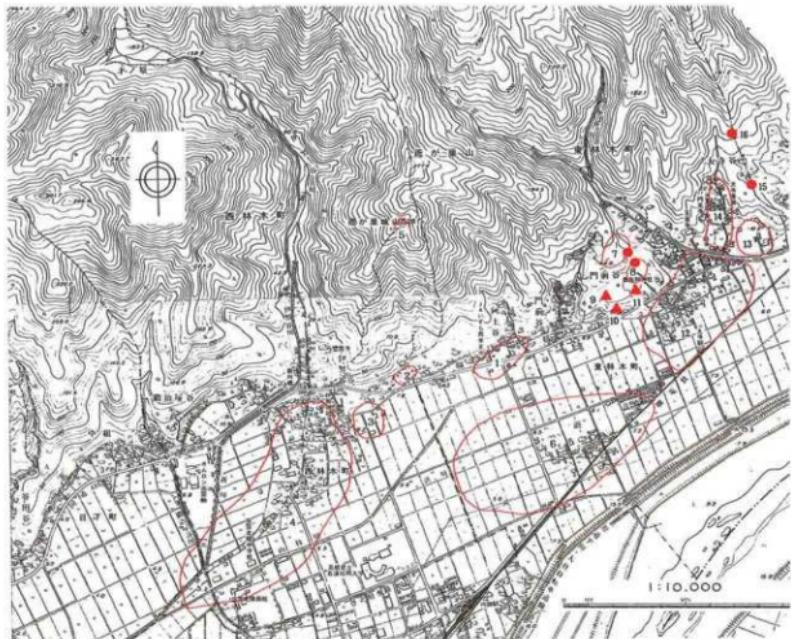
中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの構造が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、出雲大社境内遺跡から平安時代から中世にかけての出雲大社の壮大さを示す3本を束にした柱跡が確認されたことは、建築学的に貴重な発見となっている。そのほか、矢野遺跡からは14~15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、蔵小路西遺跡・鍋原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

### III. 門前遺跡の発掘調査

#### 1. 発掘調査の概要

調査地は以前には宅地及び水田として利用されており、北側には東西に国道431号線が通り、西側には山持川へと通じる排水路が通っている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの水田耕土及び堆積土約2.5mを重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北とも5m間隔のグリッドを設定し、西から1~8Grとした。また、北から南にA~Gとグリッド名を付けているが、調査区の形状からD3、E3、F3、G1、G2Grについては5m×3m、G3Grについては3m×3mのグリッドとなっている。調査面積は、834m<sup>2</sup>である。なお、水処理及び堆積土の状況を調査するために調査区を囲むように約30cm幅の側溝を設定している。

調査は便宜上西側から調査を開始し、西側を終えてから東側の調査に着手した。しかし、下層からの湧水によって水処理もままならない状況で、特に西側では遺構の検出ができなかつたうえ包含層についても完掘することができなかつた。また、集中豪雨などによりセクションが大きく崩壊し、十分な堆積土の確認もできなかつた。



第5図 門前遺跡周辺の遺跡

## 層序（第8図・第9図・第10図）

基本的な層序は、調査開始面上層から、オリーブ色粘質土、灰（明）オリーブ色粘質土、緑灰色粘質土、褐色粘質土と堆積して造構面である灰色粘質土あるいは灰褐色砂質土へと達している。このうち、緑灰色粘質土、褐色粘質土が弥生時代後期から終末期にかけての遺物を中心とした安定した包含層となっており、標高は2.00m～2.60m付近の間にある。なお、この上層は中近世期の堆積と考えられる。

また、堆積土の状況は調査区の中でも一様ではなく、C4Gr以東においては灰褐色砂質土が高い位置に堆積して褐色粘質土の堆積が薄く、そこから南北に向かっては砂の位置が低く、褐色粘質土の堆積が厚くなっている。

## 遺構（第7図）

調査区内からの湧水がひどく、最初に着手した西側では遺構が検出できる状況ではなく、遺構の配置については不明である。しかしながら、セクション上では遺構面である灰色粘質土及び褐灰色砂質土上面において落ち込みが確認されていることから、西側においても遺構が存在していることは明らかである。

一方、後半に着手した調査区東側においては、西側で湧水を汲み取ったことで残存状況は良好ではないものの、溝状遺構2、土壌状遺構11、ピット状遺構26、落ち込み状遺構7と多数の遺構を検出している。遺構内からは弥生時代後期から終末期にかけての遺物が多く検出されており、遺構はこのいずれかの時期に築かれたものと推察される。

溝状遺構には、A7・A8・B8GrにかけてSD01を検出している。完全な形ではないが、後述する布掘り建物跡を囲むような配置となることから、何らかの関連をもつものと考えられ、弥生時代後期の遺物が出土している。

土壌状遺構のうちB7Gr SK03とC7Gr SK01はともに基軸を西南西一東北東に向け、隅丸長方形状を呈するものであり、底面直上には1.5mの等間隔に長さ60cm程度の木材が据え置かれている。この2つの遺構は布掘り建物跡と考えられ、据え置かれた木材は柱が沈下しないように固定する機能を有していたものであろう。また、C6Gr SK02は木蓋を有す貯蔵穴と考えられる。

その他、ピット状遺構や落ち込み状遺構は機能としては不明なものが多く、明確な掘立柱建物跡となるような配置は認められない。

## 遺物（第6図・第7図）

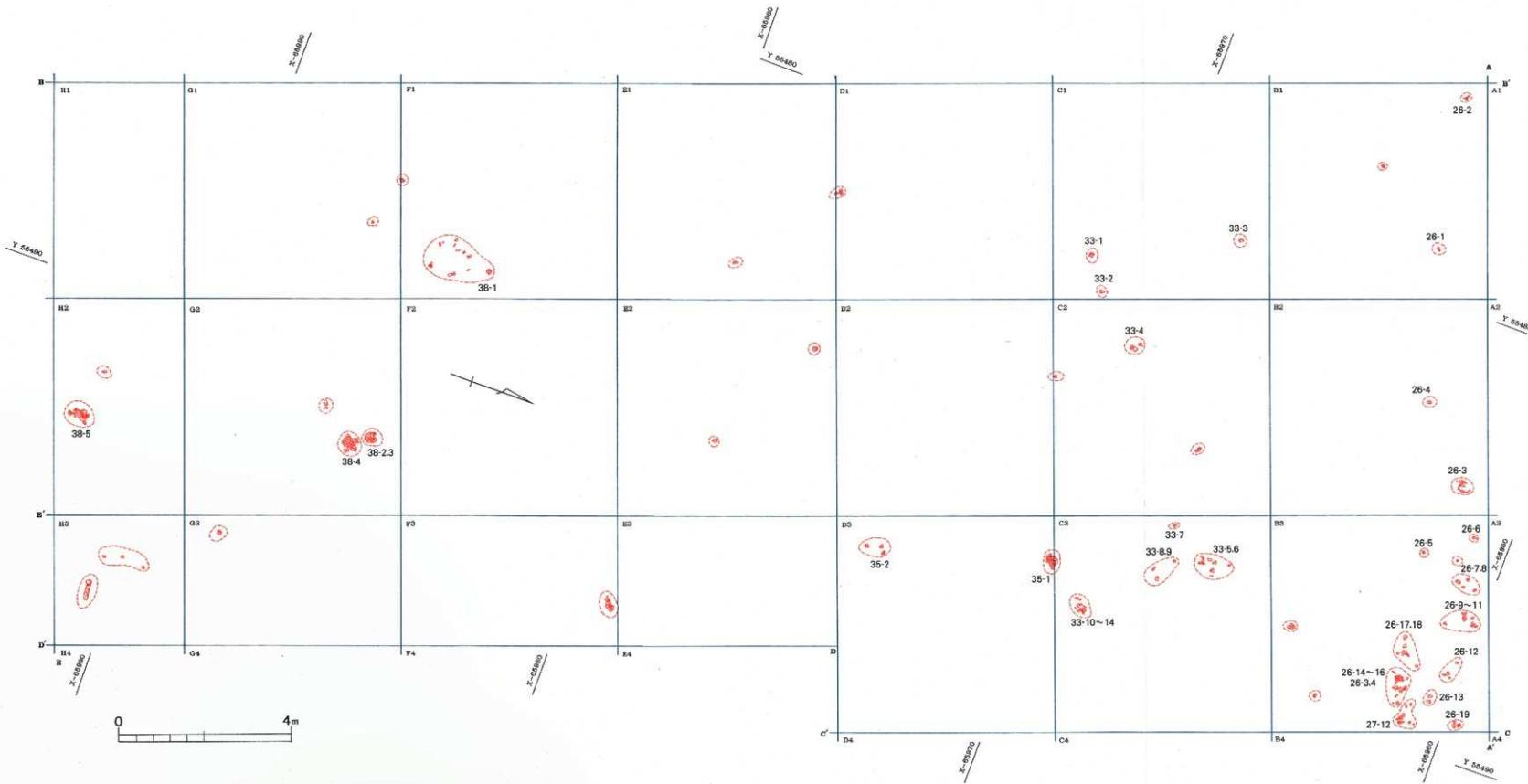
遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、木製品、石器、獸骨などが出土しており、コンテナ31箱分と比較的多く出土している。

最も古い遺物は、弥生時代前期の甕片や石盤などが数点出土しており、この時期が当該地における遺跡の初源と考えられる。また、時期的には弥生時代後期から終末期にかけての遺物が最も多く、的場式土器、草田5期・6期頃の出土量が他を圧倒している。このことから、遺跡の中心時期は当該期にあったことは明らかである。

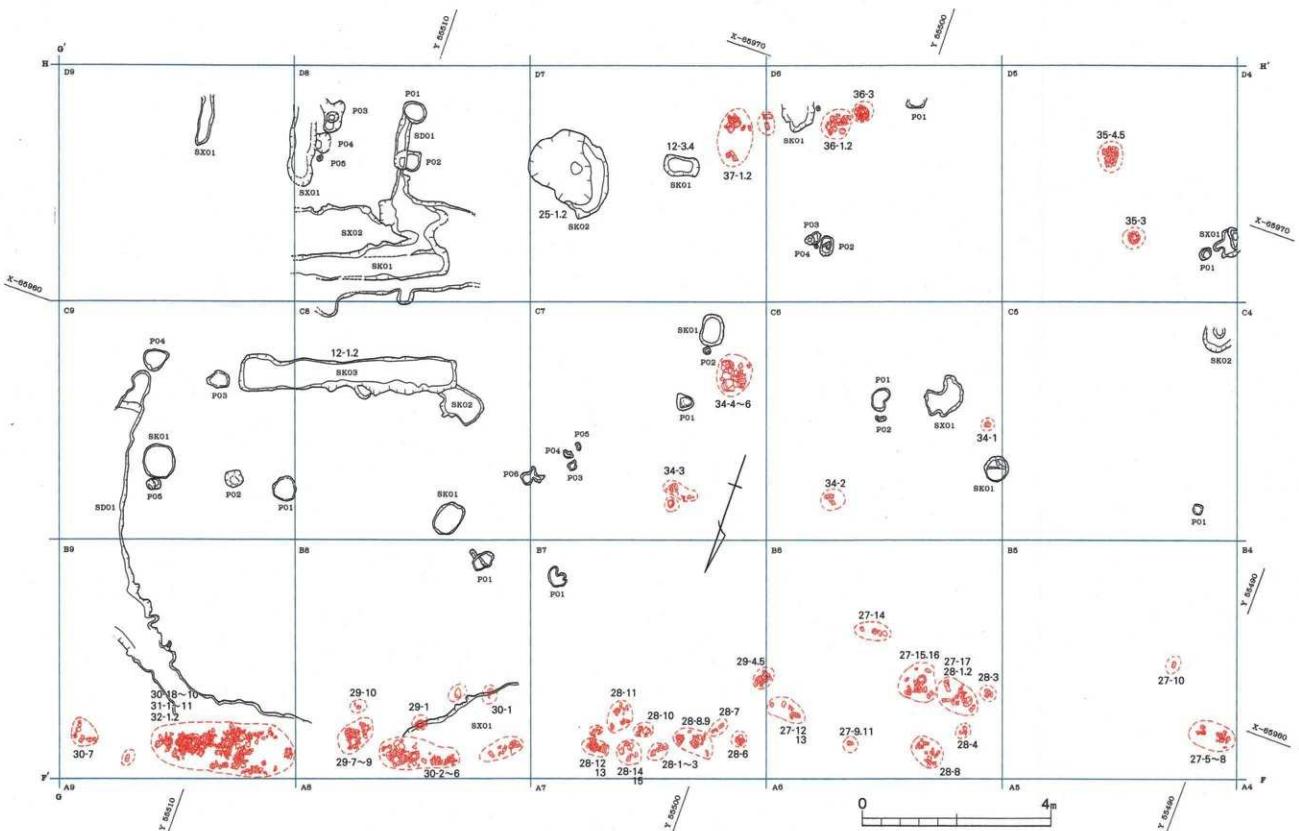
遺物の出土状況を見ると、調査区北側と東側に集中する傾向が認められる。このことから、北東に位置する阿土谷の奥部に向かって遺跡の中心部があるものと推察される。また、弥生時代前期の遺物は7Gr以西からの出土であることが注意される。

やや特異な遺物としては、管玉が1点出土している。南西に位置する山持遺跡では玉作りが行なわ

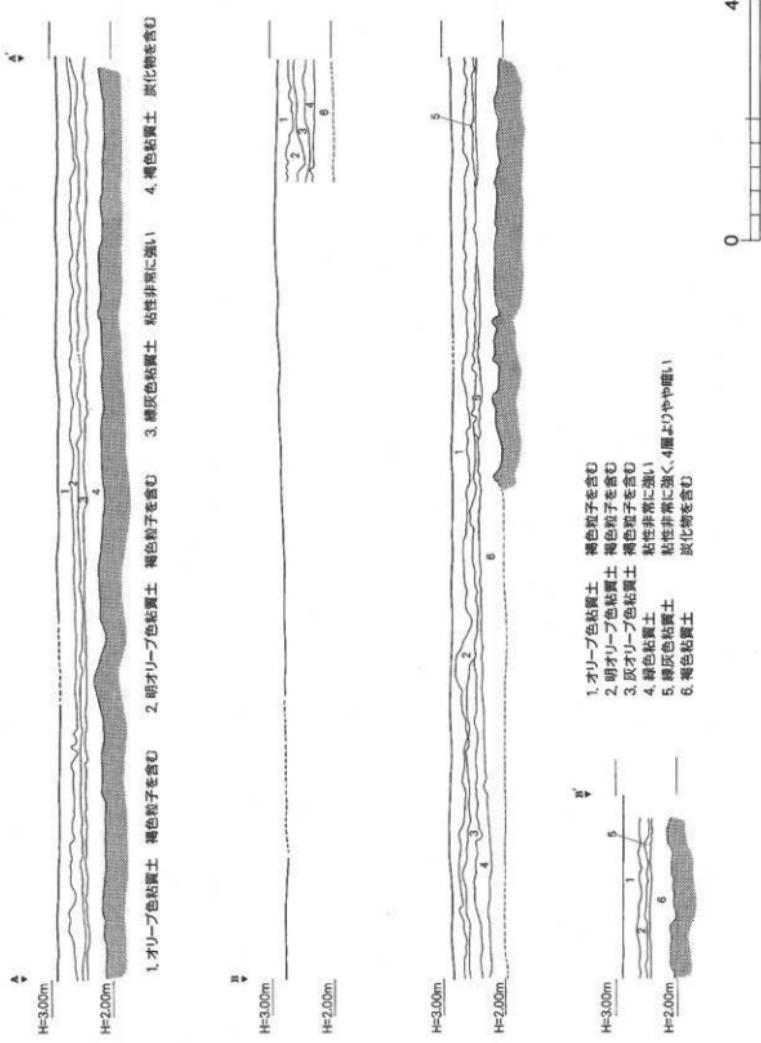
れていたことが明らかになっており、獸骨は、上層からの出土で中近世のものと考えられるが、馬齒や鹿の下顎骨と考えられるものも出土している。



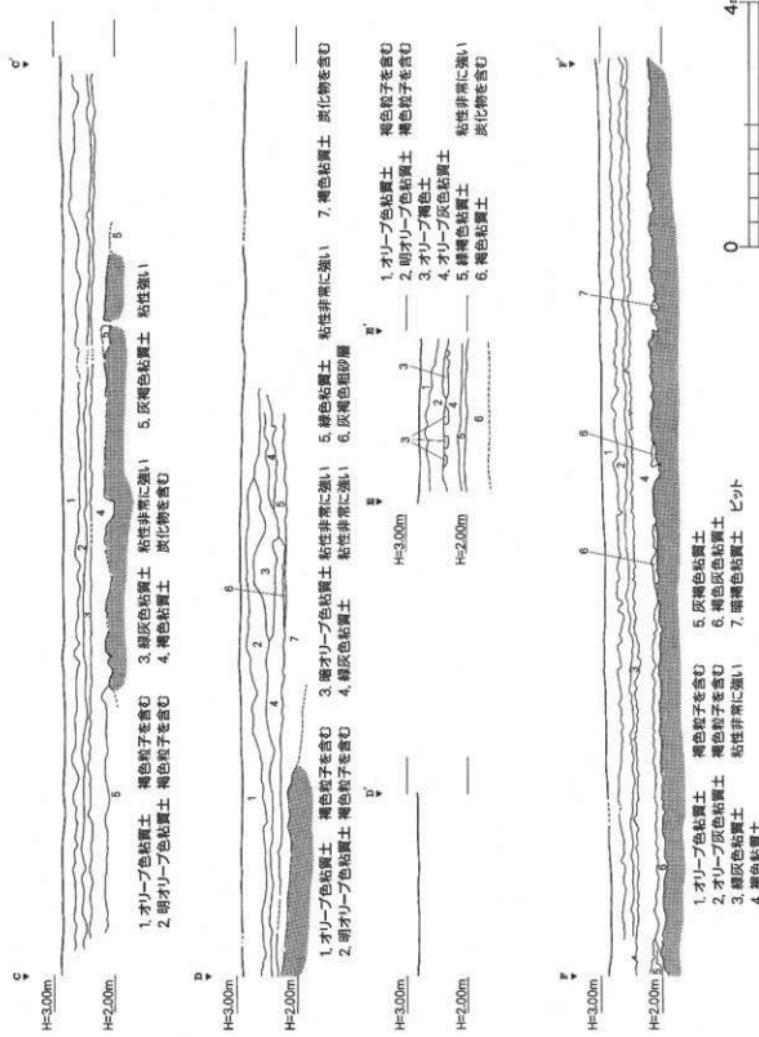
第6図 門前遺跡 遺構配置図(1)



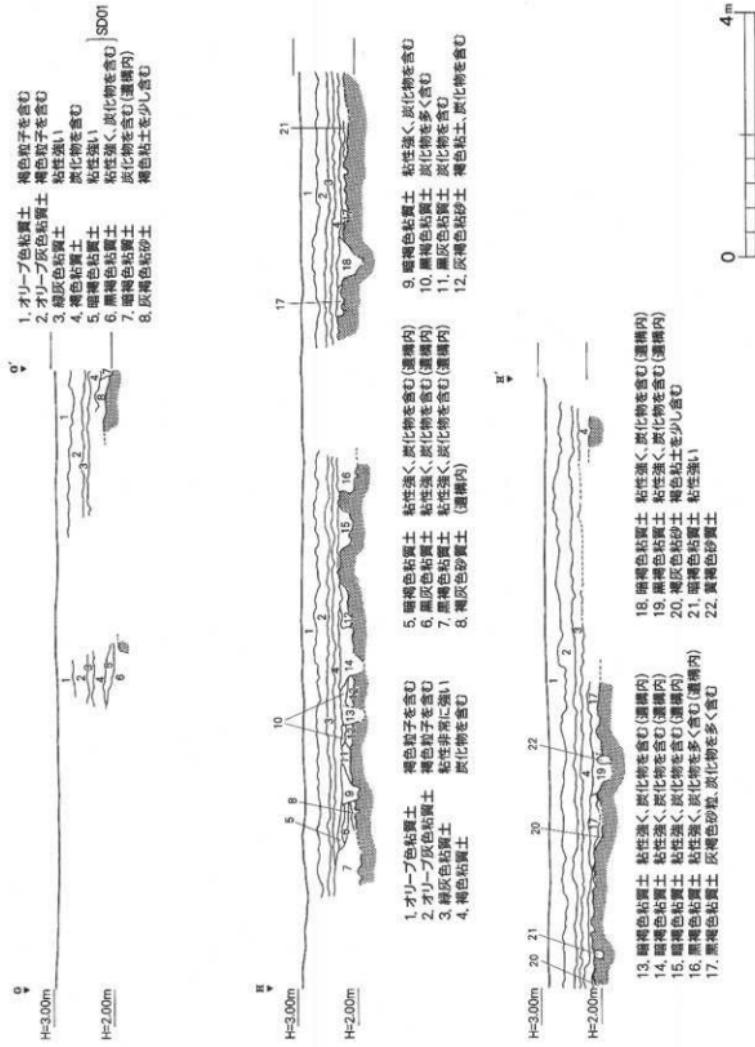
第7図 門前遺跡 遺構配置図(2)



第8図 A-A'、B-B' 埋積土層図



第9図 C-C'、D-D'、E-E'、F-F' 堆積土層図

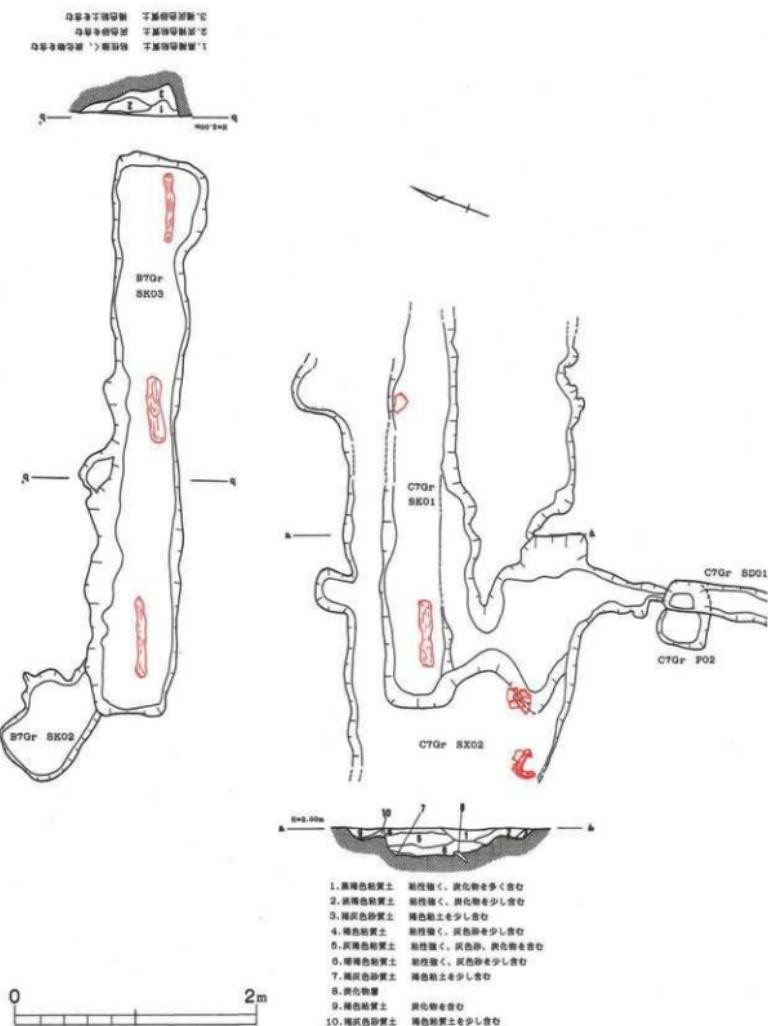


第10図 G-G'、H-H' 堆積土層図

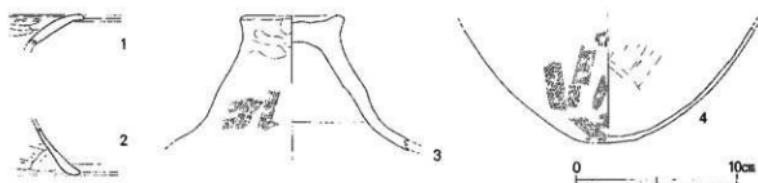
## 2. 遺構と遺物

布掘建物跡 (B7Gr SK03・C7Gr SK01) (第11・12図)

SK03は、B7Grの灰色粘質土上面で検出した西南西一東北東に基軸をもつ土壤状遺構である。平面プランは長軸長4.50m、最大幅77cmを測る隅丸長方形形状を呈している。なお、検出高は標高2.00mである。



第11図 布掘建物跡実測図



第12図 布掘建物跡 (B7Gr SK03 C7Gr SK01) 出土遺物

覆土には上層に炭化物を含む黒褐色粘質土、中層に灰褐色粘質土、下層には褐灰色砂質土が堆積して、灰褐色砂質土にまで達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ち、底面には若干の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦に作り出しており、最深部までは25cmを測る。

遺物には、弥生時代後期から終末期にかけての土器片のほか、底面直上に約1.5mの等間隔に長さ約60cmの木材が据え置かれていることが注意される。

C7Gr SK01は、灰褐色砂質土上面で検出した西南西一東北東に基軸をもつ土壙状遺構である。平面プランは、東側が湧水のために検出できていないが、長軸長3.3m以上、最大幅80cmを測り、隅丸長方形形状を呈するものと考えられる。また、SX02と切合関係にあり、これよりも古い遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高2.00mである。

第11図4～8層がSK01の覆土にあたり、上層から褐色粘質土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土、最下層には褐灰色砂質土や炭化物層が部分的に堆積して灰褐色砂質土へと達している。断面の形状は、南側ではSX02によって切られているために明らかではないが、北側では肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは29cmを測る。

遺物には弥生時代後期から終末期にかけての土器のほか種子（桃？）、底面直上に長さ60cm程度の木材が2ヶ所に等間隔で据え置かれた状態で出土している。なお、1ヶ所については湧水のために図示はできなかった。

以上のことから、B7Gr SK03とC7Gr SK01は、形状や遺構の基軸が同様で、木材が据え置かれた配置も一致すると予想されることから、これらの遺構はともに同じ機能を果たしていたことは明らかで、1間×2間の布掘建物跡ものと考えられる。なお、布掘建物跡は市内下古志遺跡でも検出されている。

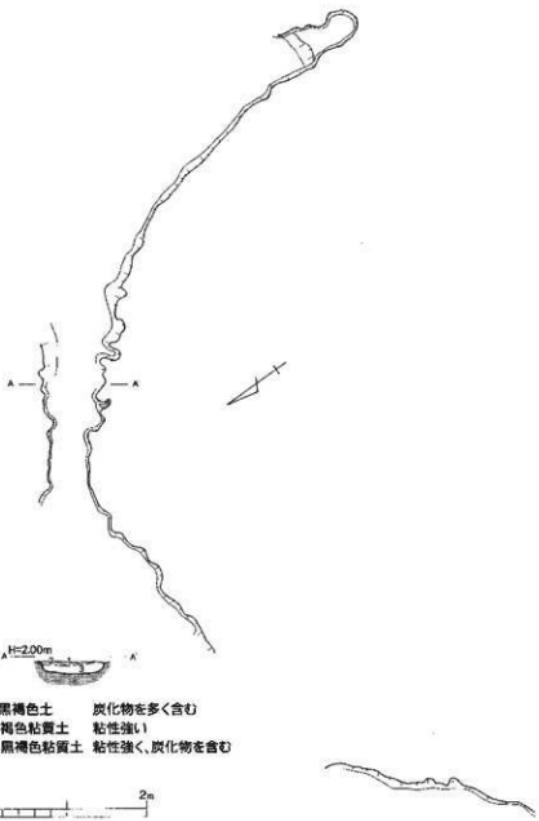
第12図1、2はSK03出土の弥生土器器台である。1は口縁部で、外反気味に立ち上がった後外傾し、端部を丸く仕上げている。2は脚部で、外反気味に広がった後外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。3はSK01出土の弥生土器蓋である。天井部は強くナデて凹ませ、口縁部の立ち上がりは器皿中程から外反しながら広がる。

#### A 7・A 8・B 8 G r S D 0 1 (第13図)

灰色粘質土上面で検出した溝状遺構である。一部が調査区外へと達しているが、現状では長さ11.4m以上、最大幅1.0m、狭いところでは50cmを測る。なお、検出高は標高1.94mである。

覆土には上層に炭化物を多く含む黒褐色土や褐色粘質土、下層には炭化物を含む黒褐色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はやや丸くレンズ状に作り出しており、最深部までは21cmを測る。なお、底面におけるレベルは西側では1.80m、中央B9杭付近では1.75mと最も深く、南側では1.85mとなっており、一様ではない。

遺物は少量であるが弥生時代後期頃の甕片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能としては、底面におけるレベルから水路などとは考えにくい。むしろ南に位置する布掘り建物跡を囲むような配置であることから、何らかの関連をもつものと考えられる。



第13図 A7 A8 B8G r SD01実測図

#### B4Gr SK01 (第14図)

B4Grの灰色粘質土上面で検出した土壤状遺構である。平面プランは径約50cmのほぼ円形状を呈しており、検出高は標高1.96mである。

覆土には砂粒を含む暗褐色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から比較的緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは8cmを測る。なお、北側では一度平坦面を作り出でさらに南側に位置する最深部へと落ちている。

遺構内からの出土遺物は皆無であり、遺構が築かれた時期について断定することは難しいが、周辺の遺構や上部包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代終末期頃に築かれた可能性が高い。機能に

については他の遺構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められず、不明である。

#### B 4 Gr SK 02 (第15図)

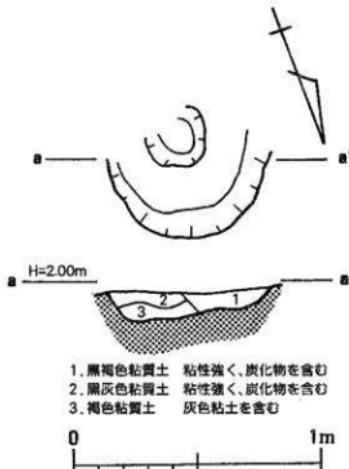
B4Grの灰色粘質土上面で検出した土壌状遺構である。平面プランは、南側が湧水により検出出来なかつたために不明である。なお、検出高は標高1.96mである。

覆土には西側に炭化物を含む黒褐色粘質土、東側上層には炭化物を含む黒灰色粘質土、下層には褐色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて平坦面を作り出し、南側ではさらにピット状に深く掘り込んだ最深部までは17cmを測る。

遺物には弥生時代後期から終末期にかけての甕片が数点出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、西側調査区では湧水のために遺構を検出することができない状況であったが、セクション上からも遺構が存在することは明らかであり、一段深く掘り込まれた部分があることや南に位置するC4Gr SX01との配置関係から、掘立柱建物跡の一部の可能性もある。



第14図 B4Gr SK01実測図



第15図 B4Gr SK02実測図

#### B 6 Gr SK 01 (第16図)

B6Grの灰色粘質土上面で検出した南南東一北北西に基軸をもつU字状遺構である。平面プランは、長軸長68cm、最大幅50cmを測る楕円形状を呈している。なお、検出高は標高1.91mである。

覆土には上層に炭化物を含む褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土と堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは30cmを測る。

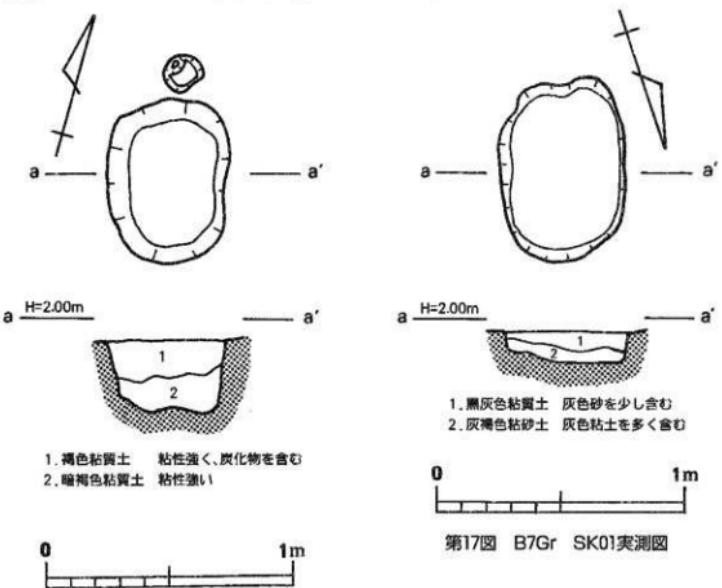
遺物には弥生時代後期頃の甕片が数点出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能としては、C6Gr SK01時期や形状などが類似していることから、何らかの関連をもつ遺構の可能性がある。

### B7Gr SK01 (第17図)

B7Grの灰色粘質土上面で検出した南西—北東に基軸をもつ土壌状造構である。平面プランは、長軸長76cm、最大幅52cmを測る橢円形状を呈している。なお、検出高は標高1.95mである。

覆土には上層に黒灰色粘質土、下層に灰褐色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸くレンズ状を作り出しており、最深部までは13cmを測る。

遺物は皆無であり、造構が築かれた時期については断定できないが、周辺の造構や上部包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代終末期頃に築かれた可能性が高い。機能については、周辺の造構との関連も認められることから不明である。



第16図 B6Gr SK01実測図

### B7Gr SK02 (第18図)

B7Grの灰色粘質土上面で検出した土壌状造構である。東側では布掘り建物跡であるSK03と切合關係にあり、これよりも古い時期の造構であることが明らかである。平面プランは、長軸長1.0m以上、最大幅75cmを測り、西南西—東北東に基軸をもつびつな形状を呈している。なお、検出高は標高1.95mである。

覆土には炭化物を含む黒褐色粘質土、灰褐色粘質土と堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは5cmを測る。

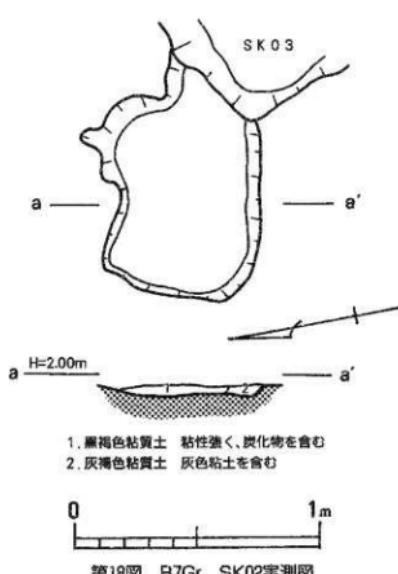
遺物は皆無で、機能については不明であるが、時期についてはSK03よりも古い造構であることは明らかであり、弥生時代後期頃に築かれた可能性が高い。

### B8Gr SK01 (第19図)

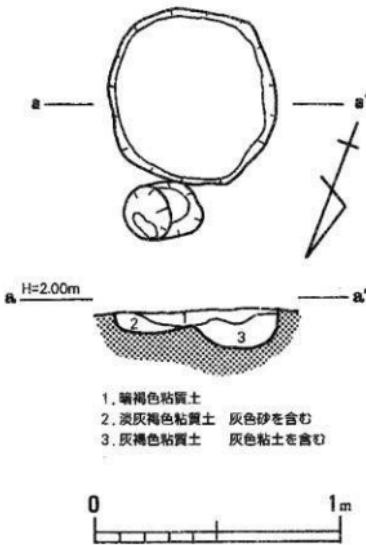
B8Grの灰色粘質土上面で検出した土壤状遺構である。平面プランは、径約70cmのほぼ円形を呈しており、検出高は標高1.93mである。

覆土には上層から暗褐色粘質土、淡灰褐色粘質土、灰褐色粘質土と堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は一様ではなく至るところに凸凹が認められ、最深部までは17cmを測る。

遺物には弥生時代終末期頃の高坏が1点出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、掘立柱建物跡となるような配置は認められず、不明であるが、SD01や布掘り建物跡と関連する遺構である可能性が高い。



第18図 B7Gr SK02実測図



第19図 B8Gr SK01実測図

### C5Gr SK01 (第20図)

C5Grの灰褐色砂質土上面で検出した土壤状遺構である。南側が調査区外へと達しているため、平面プランは明らかではないが、現状から推察すれば南東-北西に基軸をもつ楕円形状を呈するものと考えられる。なお、検出高は標高1.94mである。

覆土には上層から炭化物を含む黒褐色粘質土、褐灰色粘砂土、灰褐色粘砂土と堆積して灰褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は凸凹が認められるものの丸く作り出しており、最深部までは18cmを測る。

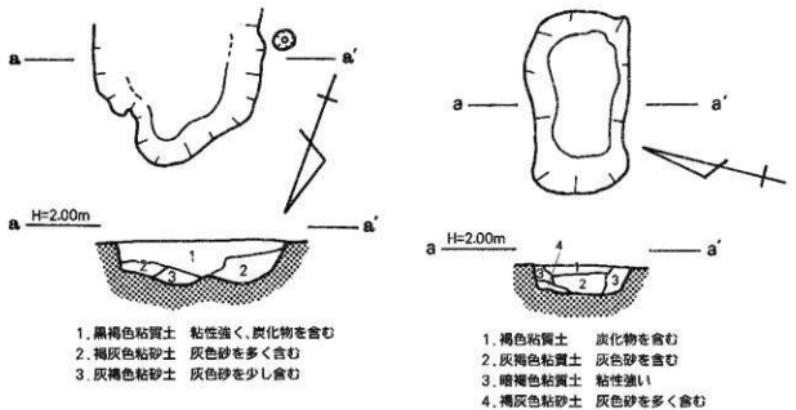
遺物には弥生時代終末期頃と考えられる壺片が数点出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、形状や遺構内から種子(桃?)が出土していることなどから貯蔵穴などが想定される。

### C6Gr SK01 (第21図)

C6Grの灰褐色砂質土上面で検出した西南西一東北東に基軸をもつ土壌状遺構である。平面プランは長軸長75cm、最大幅43cmを測る隅丸長方形状を呈している。なお、検出高は標高1.94mである。

覆土には上層から炭化物を含む褐色粘質土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土、褐灰色粘砂土と堆積して灰褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは12cmを測る。

遺物には弥生時代後期頃の甕、鉢の小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、B6Gr SK01と規模や形状、時期が類似していることなどから、何らかの関連をもつ遺構である可能性がある。



第20図 C6Gr SK02実測図

第21図 C6Gr SK01実測図

### C6Gr SK02 (第22図)

C6Grの灰褐色砂質土上面で検出した東南東一西北西に基軸をもつ土壌状遺構である。平面プランは長軸長1.75m、短軸長1.25mを測るややいびつな楕円形状を呈している。なお、検出高は標高1.95mである。

覆土には上層に炭化物を含む淡褐色粘質土、黒褐色粘質土、中層には灰褐色粘質土、褐色粘質土、最下層には暗褐色粘質土が堆積して最深部は灰色粗砂層にまで達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて狭い底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは45cmを測る。なお、西側では一度平坦面を有し、そこからさらに最深部へと落ちている。

遺物には、弥生時代後期頃の遺物が出土していることから、当該期に築かれた遺構であろう。機能としては、上層の堆積土状況から推察すれば木蓋をしていたものと考えられ、貯蔵穴などが想定される。

### A 7 Gr P 01 (第23図)

A7Grの灰色粘質土上面で検出した西南西-東北東に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは、長軸長50cm、最大幅32cmを測る楕円形状を呈している。なお、検出高は標高1.94mである。

覆土には灰色砂を多く含む黒灰色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて北側に平坦面を有し、南側にさらに落ちた最深部までは12cmを測る。

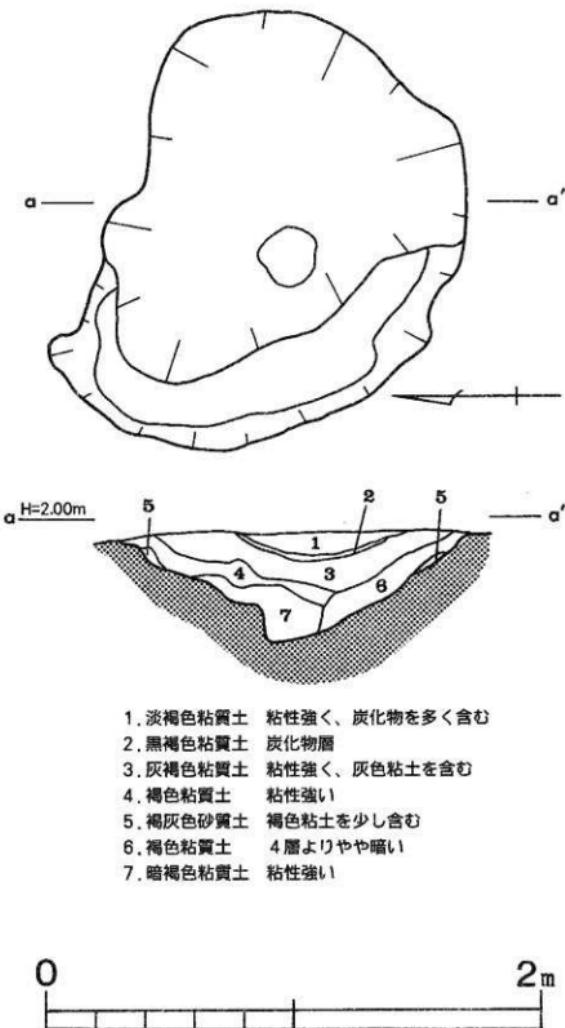
遺構内からの出土遺物は皆無であり、遺構が築かれた時期について断定することは難しいが、周辺の遺構や上部包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代後期から終末期にかけて築かれた可能性が高い。機能については他の遺構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められず、不明である。

### B 4 Gr P 01 (第23図)

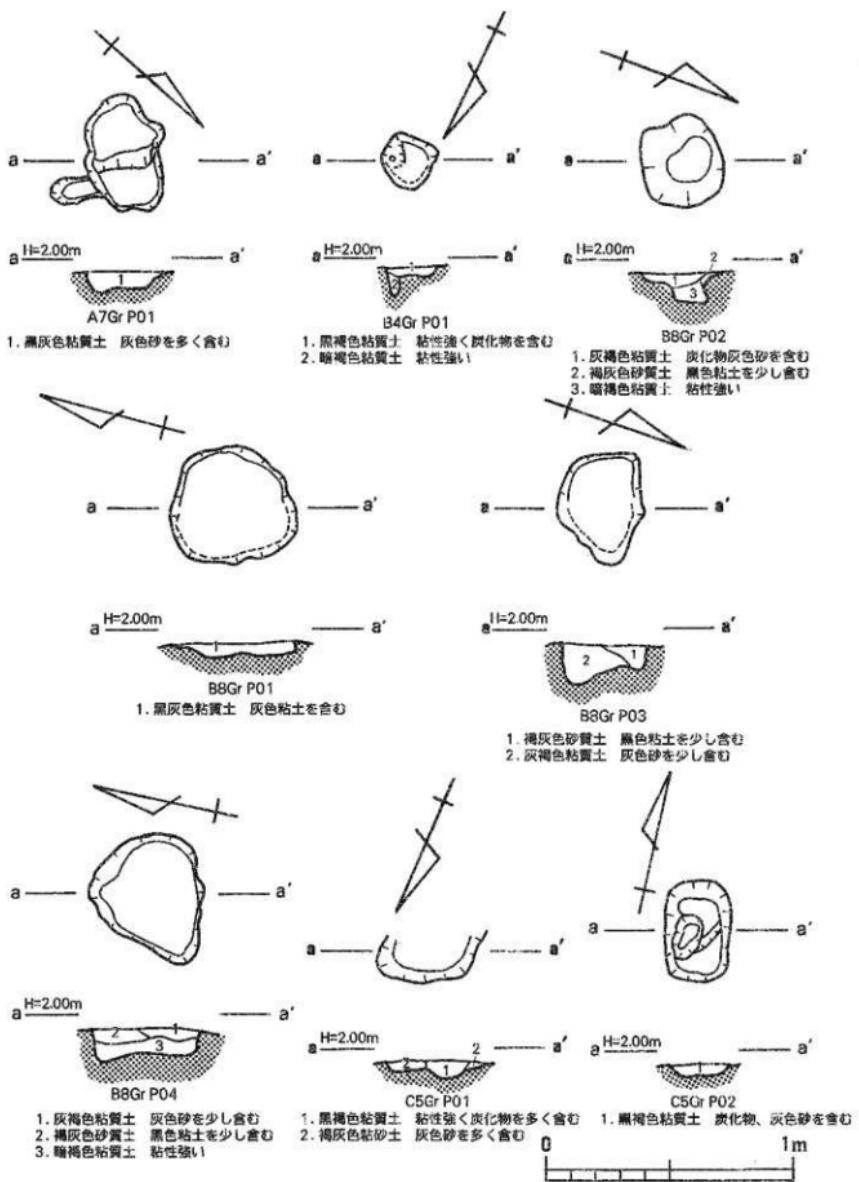
B4Grの灰色粘質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは径約24cmを測るほぼ円形状を呈している。なお、検出高は標高1.96mである。

覆土には上層に炭化物を含む黒褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、東側で深く掘り込んで肩部から鋭角に落ち、西側では約45度の角度で落ちて一度平坦面を有しており、最深部までは12cmを測る。

出土遺物は皆無であり、遺構が築かれた時期について断定することは難しいが、周辺の遺構や上部



第22図 C6Gr SK02実測図



第23図 ピット遺構図

包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代終末期頃に築かれた可能性が高い。機能については、西側の遺構配置が明らかではなく、周辺の遺構との関連も認められないことから不明である。

#### B8Gr P01 (第23図)

B8Grの灰色粘質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、径約50cmのほぼ円形状を呈しており、検出高は標高1.94mである。

覆土には灰色粘土を含む黒灰色粘質土が堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、北肩部からは緩やかに、南肩部からは鋭角に落ちて底面はほぼ半坦に作り出しており、最深部までは6cmを測る。

出土遺物は皆無で、遺構が築かれた時期について断定することは難しいが、周辺の遺構や上部包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代終末期頃に築かれた可能性が高い。機能については他の遺構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められず、不明である。

#### B8Gr P02 (第23図)

B8Grの灰色粘質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、径約40cmのほぼ円形状を呈している。

覆土は上層から灰褐色粘質土、褐灰色粘質土が堆積し、最下層に粘性の強い暗褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、北肩、南肩共に緩やかに落ち、南側で半坦面を有し、最深部までは9cmを測る。

出土遺物は皆無で、遺構が築かれた時期について断定することは難しいが、周辺の遺構や上部包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代終末期頃に築かれた可能性が高い。機能については他の遺構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められず不明である。

#### B8Gr P03 (第23図)

B8Grの灰褐色砂質土上面で検出した西南西-東北東に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは長軸45cm、最大幅36cmを測り、東側がやすほまとたね円形状を呈している。なお、検出高は標高1.95mである。

覆土には黒色粘土を少し含む褐灰色砂質土、灰褐色粘質土と堆積して灰褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて南側に偏って丸く作り出した最深部までは17cmを測る。

遺物には弥生時代終末期頃と考えられる甕片が1点出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、西に位置するB8Gr P04と1間間隔に配置されていることから、掘立柱建物跡の可能性もある。

#### B8Gr P04 (第23図)

B8Grの灰褐色砂質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、長軸長54cm、最大幅48cmを測り、西側にやや張り出したいびつな形状をしている。なお、検出高は標高1.94mである。

覆土には上層から灰褐色粘質土、黒色粘土を少し含む褐灰色粘質土、暗褐色粘質土と堆積して灰褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ半坦に作り出しており、最深部までは13cmを測る。

出土遺物は皆無であり、遺構が築かれた時期については断定できないが、周辺の遺構や上部包含層

の出土遺物から推察すれば、弥生時代後期から終末期にかけて築かれた可能性が高い。機能については、東側が調査対象外となっているために造構の配置状況が明らかではないが、東に位置するB8Gr P03と1間隔で並列していることから、掘立柱建物跡の可能性もある。

#### C5Gr P01 (第23図)

C5Grの灰褐色砂質土上面で検出したピット状造構で、南側が調査区外へと達しているために平面プランは明らかではない。なお、検出高は標高1.94mである。

覆土には中央部に炭化物を多く含む黒褐色粘質土、端部に褐灰色粘質土と堆積して灰褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から比較的緩やかに落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは8cmを測る。

遺物は土器小片1点のみで、この遺物から造構が築かれた時期について断定することはできないが、周辺の造構や上部包含層の出土遺物から推察すれば、弥生時代後期から終末期にかけて築かれた可能性が高い。機能については、部分的な検出であることから不明である。

#### C5Gr P02 (第23図)

C5Grの灰褐色砂質土上面で検出した南北東-北北西に基軸をもつピット状造構である。平面プランは、長軸長42cm、最大幅27cmを測る隅丸長方形形状を呈している。なお、検出高は標高1.94mである。覆土には炭化物を含む黒褐色粘質土が堆積して褐灰色砂質土へと達している。断面の形状は肩部から比較的緩やかに落ちて底面は凸凹が認められるものはほぼ平坦に作り出しており、最深部までは5cmを測る。

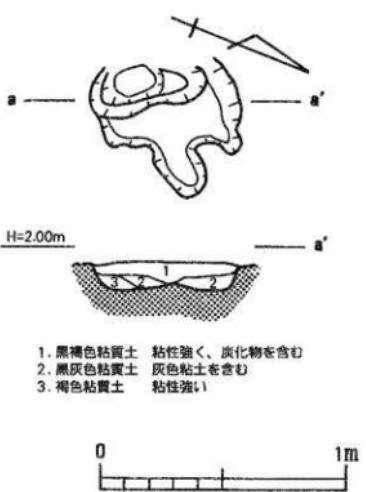
遺物には弥生時代終末期頃の甕片が1点出土していることから、造構が築かれたのも当該期であろう。機能については他の造構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められず不明である。

#### C4Gr SX01 (第24図)

C4Grの灰色粘質土上面で検出した落ち込み状造構である。西側が湧水のために平面プランは明らかではないが、東側に張り出し部を有する複雑な形状をしている。なお、検出高は標高1.93mである。

覆土には上層から炭化物を含む黒褐色粘質土、黒灰色粘質土、褐色粘質土と堆積して灰色粘質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて北側に平坦面を作り出し、南側ではさらにピット状に掘り込んで最深部までは26cmを測る。

遺物には弥生時代終末期頃の甕片数点と種子(桃?)が出土していることから、造構が築かれたのも当該期であろう。機能としては種子が出土していることから貯蔵穴あるいは北側に位置するB4Gr SK02と同規模であることなどから掘立柱建物跡の可能性もある。

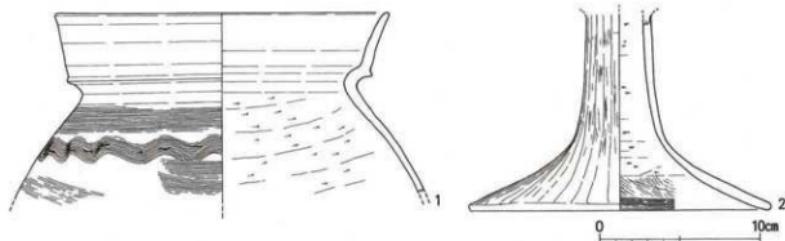


第24図 C4Gr SX01実測図

## C7Gr SX02 (第25図)

C7Grで検出した落ち込み状遺構である。

第25図1、2は弥生土器である。1は壺で、口縁部は複合口縁を呈し、外反気味に立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。体部外面は擬凹線、波状文、刺突文が施されている。2は高壺の脚部で、内面は柱部にヘラケズリ調整、据部にハケ目調整を施し、外面は柱部にヘラミガキ調整後ハケ目調整、据部にヘラミガキ調整を施している。また据部端部はナデ調整している。脚部の広がりは、外反しながら伸びた後、外方に直線的に広がり、端部は丸く仕上げている。

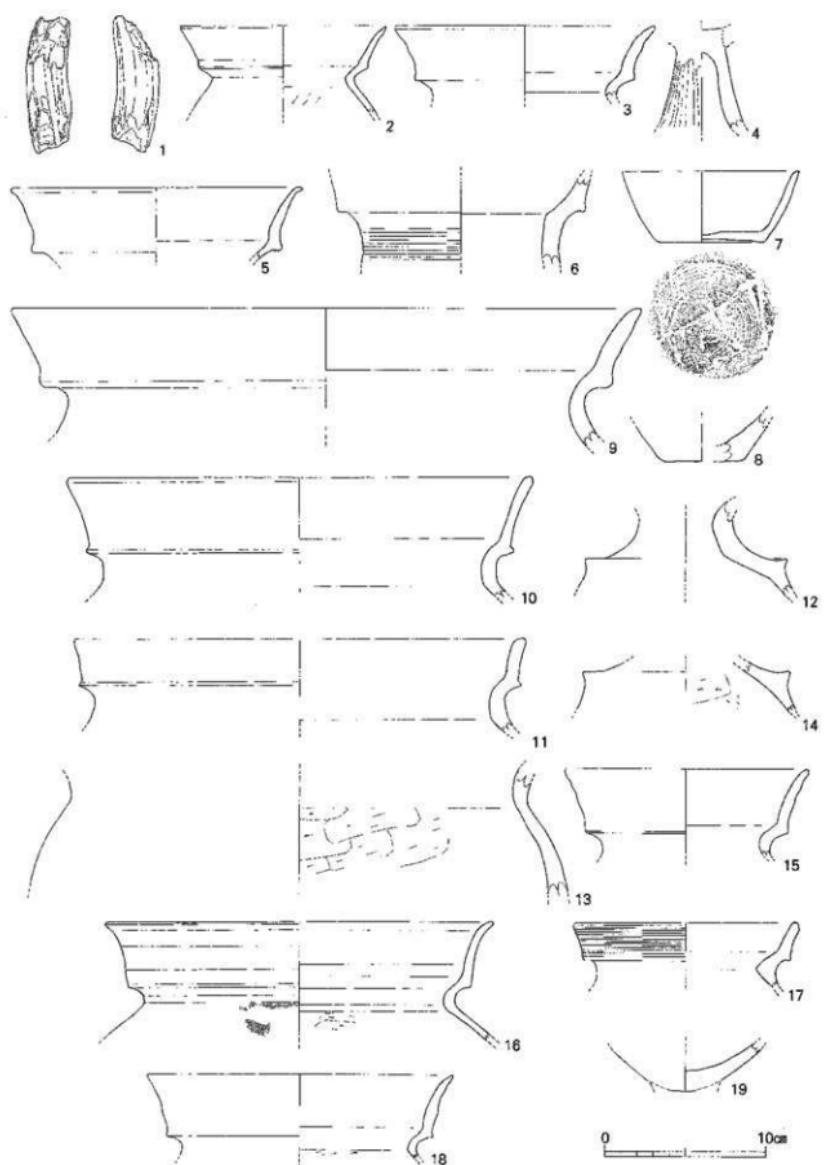


第25図 C7Gr SX02出土遺物

## 遺構面直上の遺物 (第26~38図)

第26図はA 1~3 G rで出土した遺物で、1が馬歯、7が須恵器、それ以外は弥生土器である。2、3、5、6、8~11は壺で、8は底部、それ以外は複合口縁を呈す口縁部で、内外面ともにナデ調整が施されている。また2は体部内面にヘラケズリ調整痕が残る。複合口縁の立ち上がりは、2は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部は尖らせている。3は外反しながら立ち上がり、端部を尖らせていている。5は外反しながら立ち上がった後外傾し、端部を尖り気味に仕上げる。6は口縁部上部を欠損しているため、立ち上がりの詳細は不明である。頸部に擬凹線が施されている。9は外方に直線的に立ち上がった後、端部を尖らせ、10は外反気味に立ち上がった後、端部を丸く仕上げている。11は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾し、端部は尖り気味にしている。8は底部で器壁は外方に直線的に立ち上がる。内外面ともに風化が激しく調整不明である。7は須恵器壺で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込にナデ調整、底部に回転糸切痕を残す。口縁部の立ち上がりは内湾気味で、端部は尖らせている。12、14は器台脚部で、内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施す。13は壺の頸部から体部で、頸部内外面にナデ調整を施し、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にはナデ調整を施した後、擬凹線を施している。15~18は複合口縁を呈する口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。16~18は肩部が残り、内面にヘラケズリ調整が施されている。16には肩部外面に縦ハケ、波状文も残る。複合口縁の立ち上がりは、16、18が外反しながら立ち上がり、端部は16を尖り気味に、18を尖らせている。17は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。口縁部外面に擬凹線が残る。19は低脚壺の壺部で、内外面ともにナデ調整を施す。底部に接合痕が残る。

第27図はA 3~5 G rで出土した弥生土器で、1~10、14、15は壺である。口縁部は複合口縁を呈し、内外面にナデ調整を施す。10には口縁部外面に擬凹線が施されている。複合口縁からの立ち上がりは、1~3、5~9、14、15は複合口縁から外反しながら立ち上がり、端部は1、2、6、8、9、

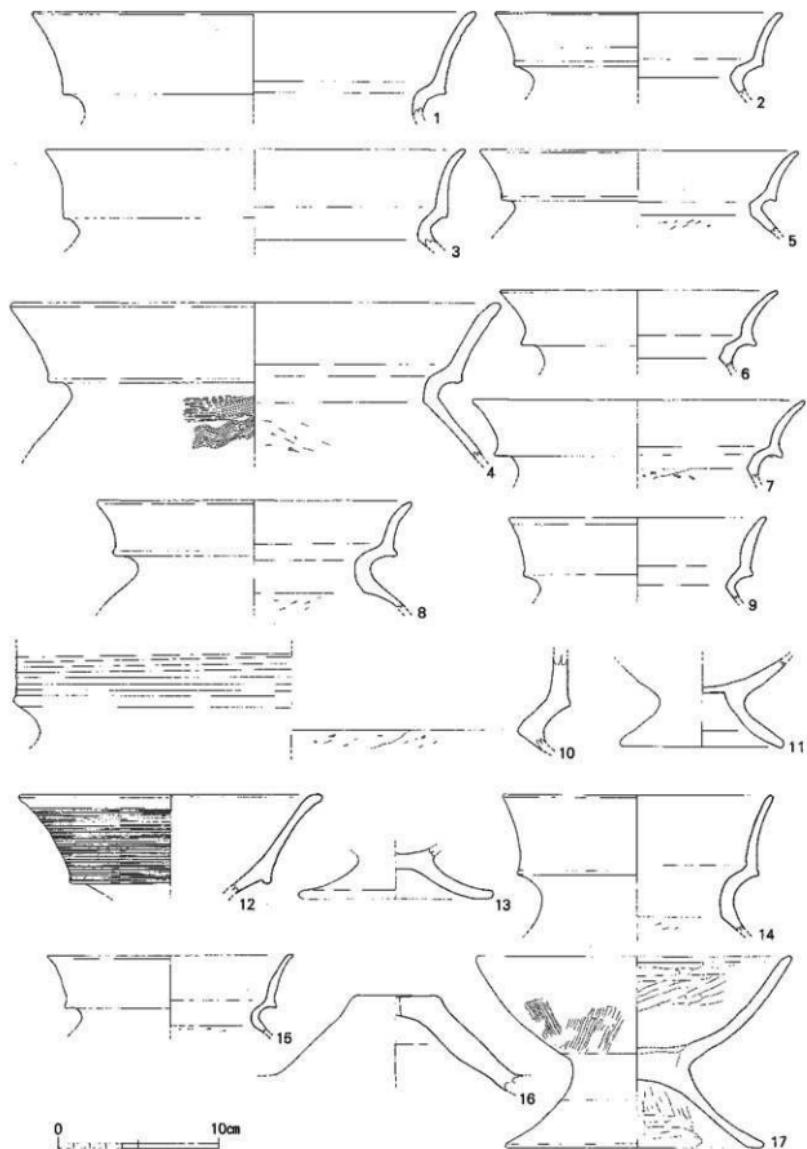


第26図 A1・2・3 Gr出土遺物

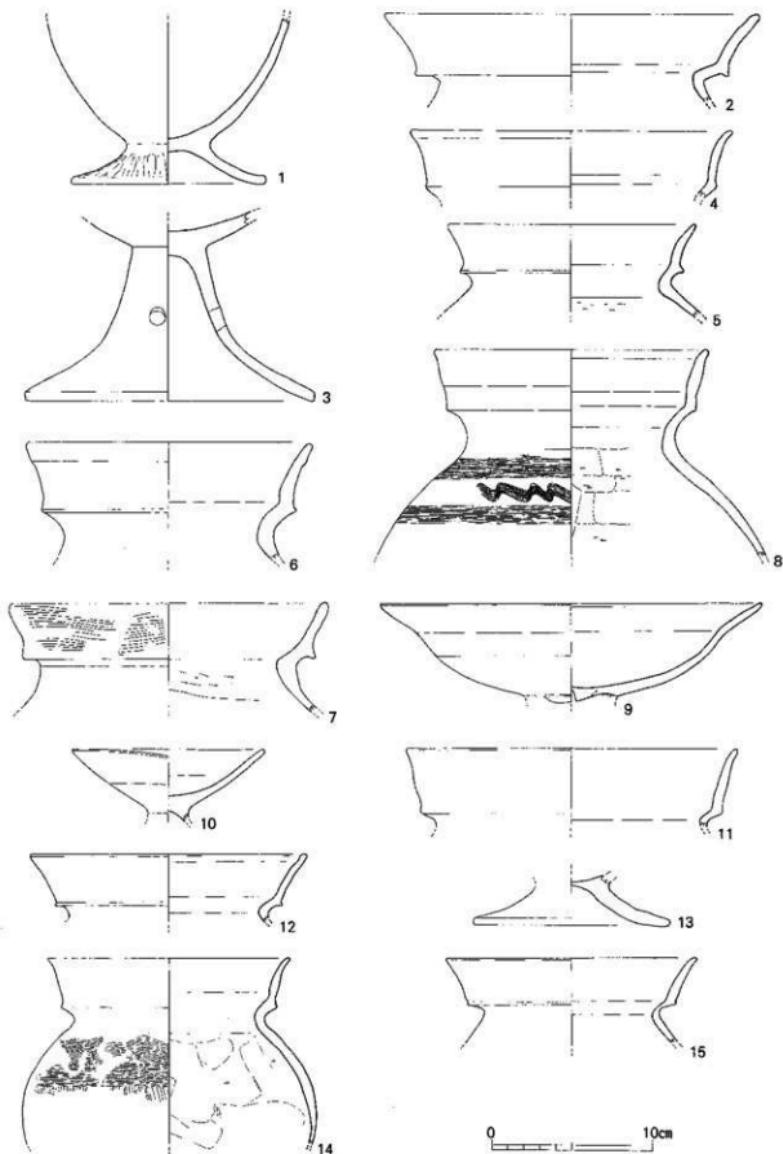
14を尖り気味に、5、15は尖らせ、3、7には平坦面を作っている。4は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾する。端部は丸く仕上げている。10は口縁部上方を欠損しているが、上方に直線的に立ち上がる。2~8、10、14、15は体部内面にヘラケズリ調整が残り、体部外面に4は波状文、擬凹線、ハケ目調整、8は波状文が施されている。11、13は低脚坏で、内外面ともにナデ調整を施す。11は坏部器壁の立ち上がりは内湾気味に立ち上がるが、口縁部を欠損している。脚部は外反気味に広がり、端部を尖り気味に仕上げている。13は坏部を欠損している。脚部は外反しながら広がり、端部は丸く仕上げている。12は器台の受部で複合口縁を呈す。内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整が施され、口縁部外面には擬凹線が施されている。16は蓋で、内面にナデ調整が残るが、外面は風化のため調整不明である。天井部には平坦面を作り中央部を穿孔している。裾部の広がりは外方に直線的に広がった後外傾するが端部を欠損している。17は高坏で、坏部には内面にヘラミガキ調整、ナデ調整、外面にハケ目調整、ナデ調整を施す。一方脚部には内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施している。坏部内面見込みに粘土の接合痕が残る。

第28図はA 5、A 6 G rで出土した弥生土器で、2、4~8、11、12、14、15は壺である。複合口縁を呈す口縁部は内外面にナデ調整を施し、5~8、14には体部内面にヘラケズリ調整が施されている。また7は口縁部外面に、8、14は体部外面に擬凹線、波状文が残る。口縁部の立ち上がりは、2、15は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。4、5、14は外反しながら立ち上がり、端部は4は尖り気味に、5、14は尖らせている。6は外反気味に立ち上がった後、端部で肥厚させ丸く仕上げている。7は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。8は複合口縁の立ち上がり上と口縁部で外側に屈曲する。端部は丸く仕上げている。11は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部を尖り気味に仕上げる。12は外方に直線的に立ち上がった後、口唇部で外反気味となり、内側に屈曲する。端部は平坦気味にしている。1は低脚坏で、坏部は内面にヘラミガキ調整、ナデ調整、外面にナデ調整が施されており、脚部は内面にナデ調整、外面にヘラミガキ調整を施している。坏部は内湾しながら立ち上がる。一方、脚部は外反しながら広がり、端部を丸く仕上げている。3は高坏で、坏部は欠損部が多くまた内外面ともに風化のため調整不明である。一方、脚部は内面にナデ調整が残るが、外面は風化が激しいもののヘラミガキ調整を施しているようである。脚部に穿孔が施されている。脚部の広がりは、外反しながら広がった後、外反気味に伸び、端部は平坦気味にしている。9は高坏で、脚部は欠損している。内面にはヘラミガキ調整とナデ調整、外面にはナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは、口唇部で外傾した後、外方に直線的に伸び、端部を尖り気味にしている。坏部中央には円盤充填され外側に穿孔が残る。10、13低脚坏である。10は脚部の大部分を欠損している。外面はともにナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。13は坏部の大部分を欠損する。内外面ともにナデ調整を施す。脚部は外反気味に広がり、端部は丸く仕上げている。

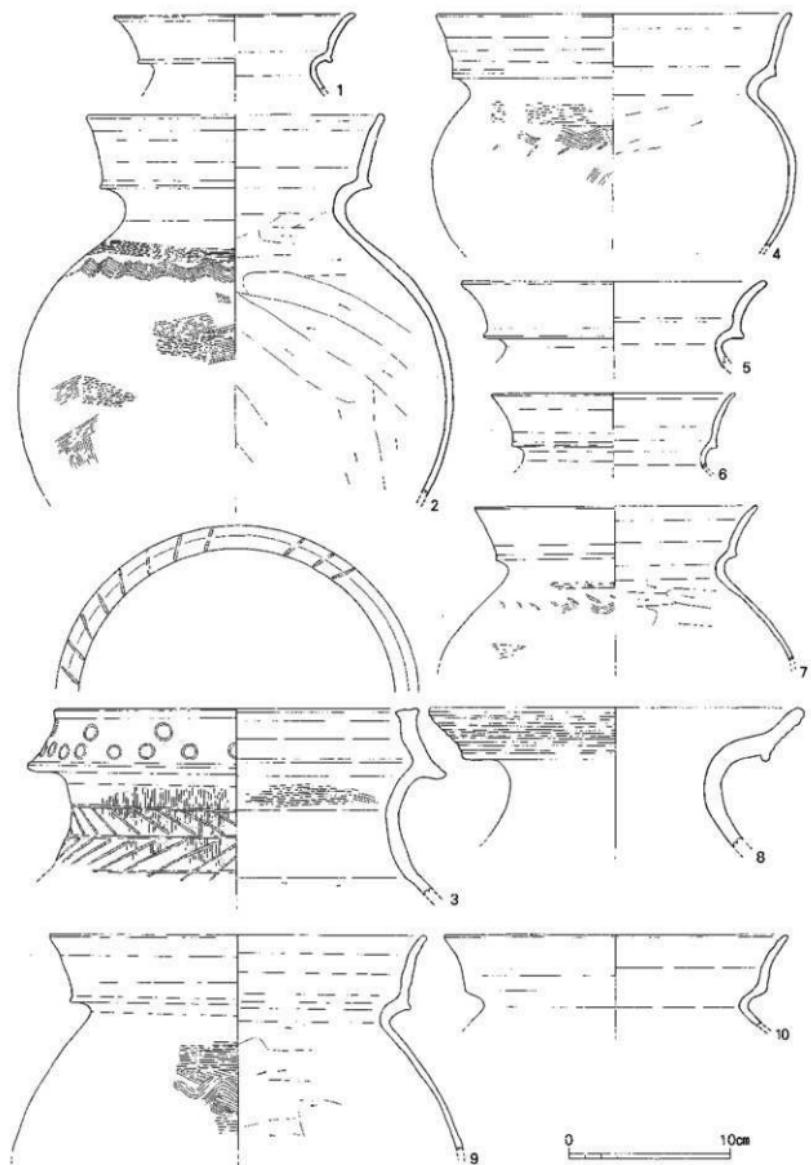
第29図はA 6、A 7 G rで出土した弥生土器壺で、口縁部は何れも複合口縁部を呈し、内外面ともにナデ調整が施されている。2~4、7、9は体部内面にヘラケズリ調整を施す。2は体部外面にはハケ目調整が施され、肩部に擬凹線、波状文が残る。3は頸部内面にハケ目調整を施す。口縁部外面に竹管文、頸部外面にはハケ目調整が施された後、羽状文が施されている。4、7は体部外面に擬凹線、波状文、刺突列点文が残る。8は口縁部外面に6条の擬凹線が施されている。9は体部外面肩部に擬凹線、波状文が残る。複合口縁からの立ち上がりは、1は外反しながら立ち上がった後外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。2、4、9は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾し、端部は丸く仕上げている。3は内側に直線的に立ち上がった後、上方に立ち上がる。端部両端を拡張させて平



第27図 A3・4・5 Gr出土遺物



第28図 A5・6Gr出土遺物



第29図 A6・7Gr出土遺物

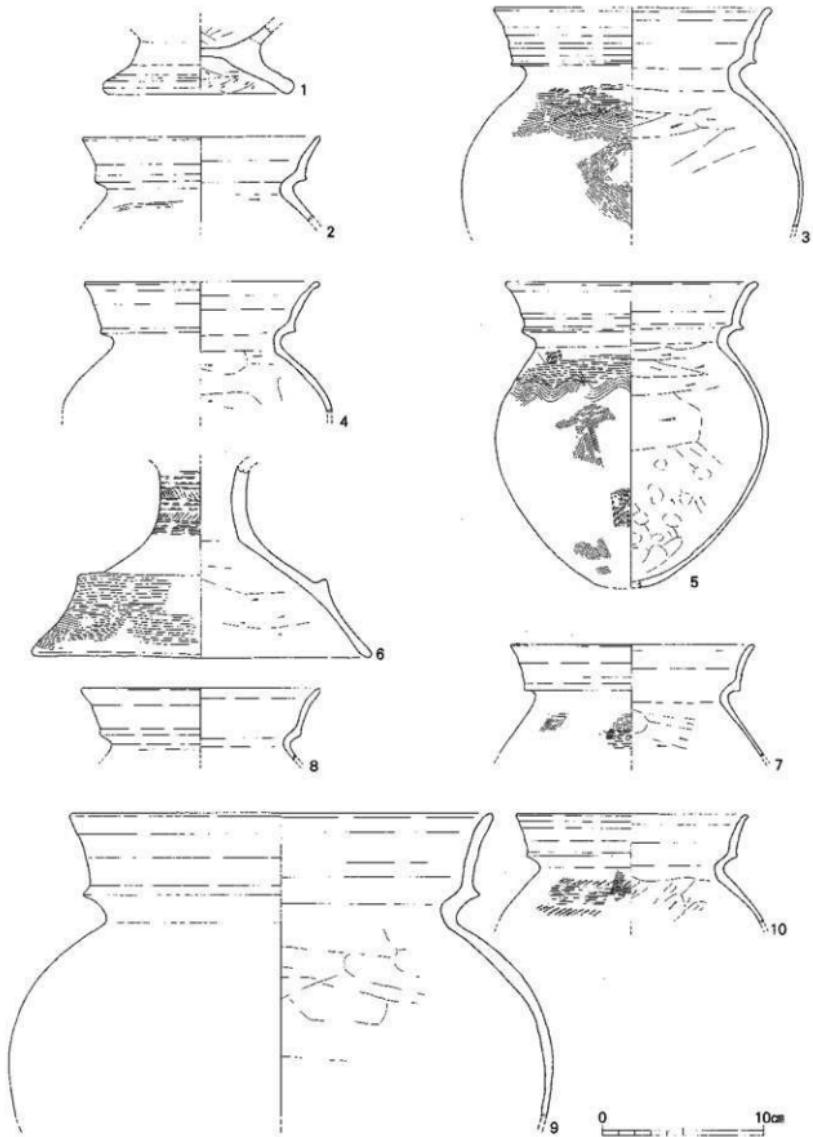
坦面を作っている。5～7、10は外反しながら立ち上がる。端部は5、10は丸く仕上げ、6、7は尖り気味に仕上げている。8は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。

第30図A 7、A 8 G rで出土した弥生土器で、2～5、7～10は壺である。口縁部はいずれも複合口縁を呈し、内外面ともにナデ調整が施されている。体部は2～5、7、9、10の内面にヘラケズリ調整が残り、5には指頭压痕の残る。一方、外面は3、5、7、10にハケ目調整が残り、2、3、5、10には擬四線が施される。このうち3、5には波状文、10には刺突列点文が残る。1は低脚坏で、坏部の大半を欠損している。脚部は内面にヘラケズリ調整を施し、外面及び脚部端部にナデ調整を施す。坏部内面見込にはヘラミガキ調整が施される。脚部の広がりは外方に直線的に広がった後、やや下方に屈曲し、端部は丸く仕上げている。6は器台の柱部から脚部で、脚部は内面にヘラケズリ調整、外面に擬四線を施す。柱部外面には擬四線、刺突列点文が施されている。脚部の広がりは内湾気味で、端部は丸く仕上げている。

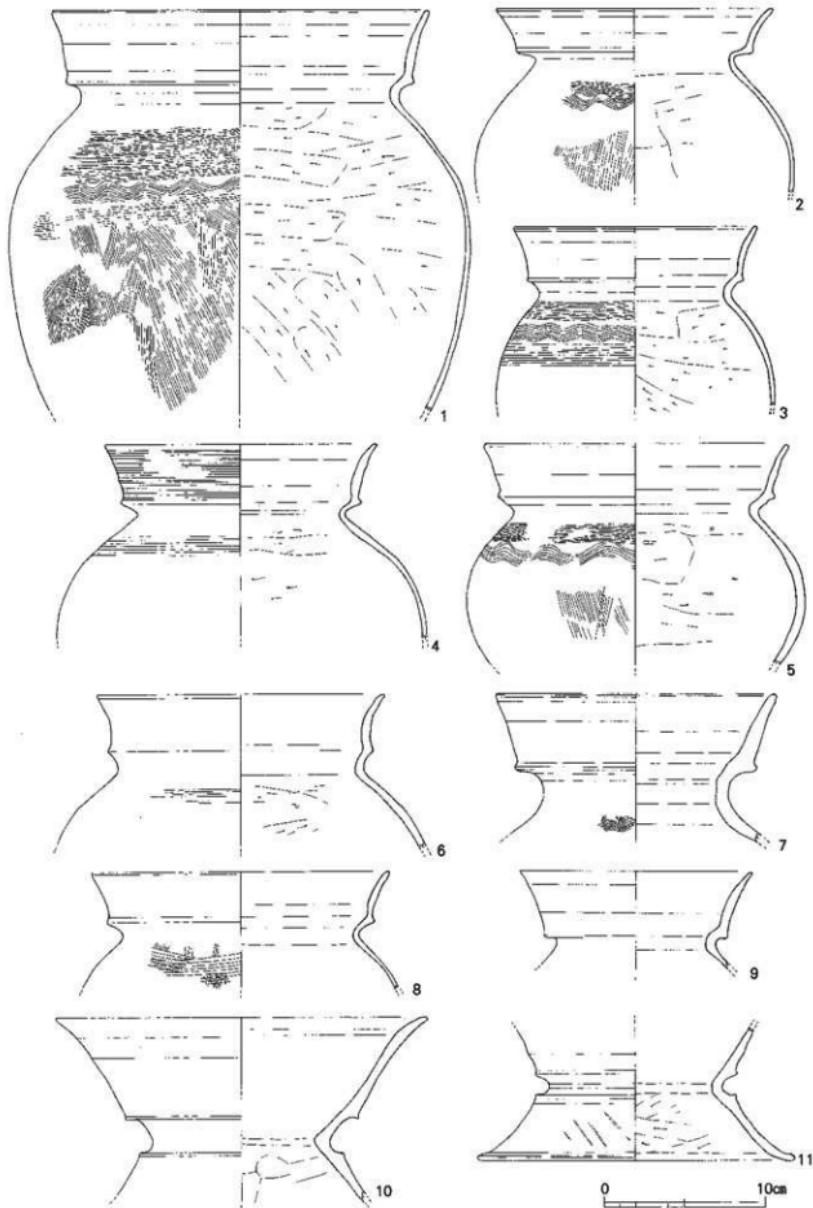
第31、32図はA 8 G rで出土した弥生土器壺である。第31図1～9は複合口縁を呈し、内外面ともにナデ調整を施す。体部は1～6、8、9の内面にヘラケズリ調整、1、2、5、7、8の外面にハケ目調整が残る。また肩部外面には1～3、5、7に波状文、1～6、8に擬四線が施されている。口縁部は1、5は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾する。端部は丸く仕上げている。2～4、6、8は外反しながら立ち上がり、端部は2～4、6は丸く、8は尖り気味に仕上げている。4は口縁部外面に擬四線が施されている。7は外方に直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。9は外反気味に立ち上がり、端部を尖らせている。10、11は器台で、受部は内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。一方、脚部は内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整が施され、10の口縁部端部、11の脚部端部はナデ調整している。また11の脚部外面にはヘラ状工具痕が残る。受部の立ち上がりは、いずれも外方に直線的に立ち上がる。10は口唇部から外反気味に立ち上がり、11は上端を欠損しているため詳細は不明である。10の端部は尖り気味に仕上げている。一方、脚部の広がりはいずれも外方に直線的に広がる。10は端部を欠損しているため詳細は不明であるが、11は外反しながら広がり、端部を尖り気味に仕上げている。

第32図1は口縁部は複合口縁を呈し、内外面ともにナデ調整を施す。一方、体部は内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。肩部外面に擬四線及び波状文が残る。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を平坦気味にしている。2は口縁部を欠損している。内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整が施されている。

第33、34図はB G rで出土した遺物である。第33図2の須恵器以外は弥生土器である。1、4は器台で、1は受部の大部分を、4は受部全体を欠損する。いずれも外面及び脚部端部にナデ調整、脚部内面にヘラケズリ調整を施す。1は受部内面にヘラミガキ調整が残る。脚部の広がりは1は外方に直線的に広がった後外傾し、4は外方に直線的に広がった後外反気味となる。端部は1が丸く、4は尖り気味にしている。7、13も器台と考えられる。7は内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整が施され、13は外面にナデ調整が残るもの、風化が著しく内面の調整は不明である。受部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。2は須恵器底部で上層からの混入遺物である可能性がある。内外面ともにナデ調整を施す。器壁は内湾気味に立ち上がる。3、5、6、8～12、14は壺で、3は口縁部は内面にハケ目調整、外面にナデ調整を施し、複合口縁を呈する5、6、8～12、14は口縁部の内外面にナデ調整を施す。体部は3、5、6、8、9、12の内面にヘラケズリ調整、14の内面にハケ目調整が残り、外面は9、14にハケ目調整が施される。なお、12の頸部外面にもハケ目調整が施されている。施文は6の頸部に凹線、刺突列点文、8、14の口縁部に擬四線、9の体部に擬四線及び刺

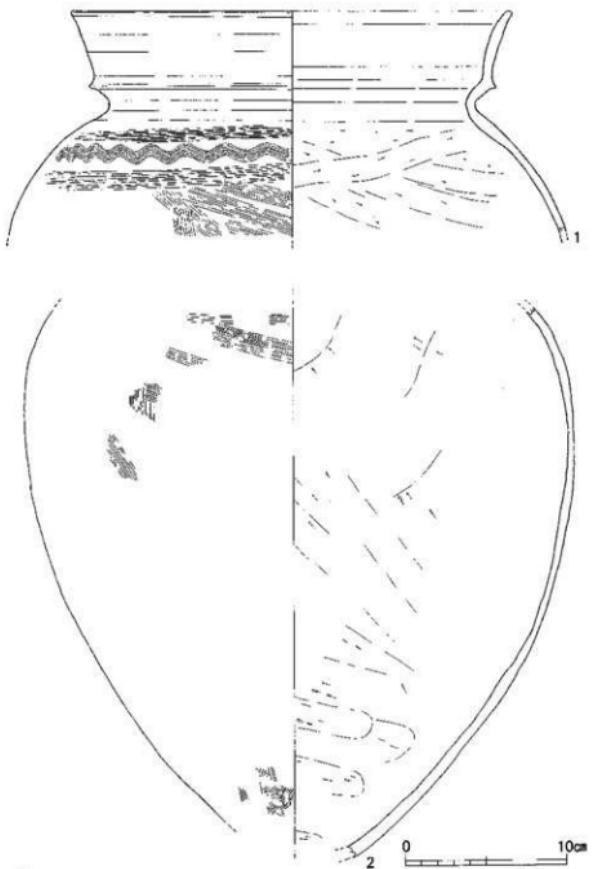


第30図 A7・8Gr出土遺物



第31図 A8Gr出土遺物①

突列点文、12の肩部に羽状列点文、13に刺突文が残る。口縁部の立ち上がりは、3は外反気味に立ち上がり、口唇部で外側に肥厚させている。端部は丸く仕上げている。5は外方に直線的に立ち上がった後、屈曲して内湾気味に伸び外傾する。端部は丸く仕上げている。6は内側に直線的に立ち上がり外傾する。端部は尖り気味にしている。8、14は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。9はやや外方に直線的に立ち上がるが、口唇部下方内側で肥厚し、口唇部外側が薄くなっている。端部は丸く仕上げられている。10は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。11は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。12は外方に直線的に立ち上がった後外反気味となる。端部は尖り気味にしている。

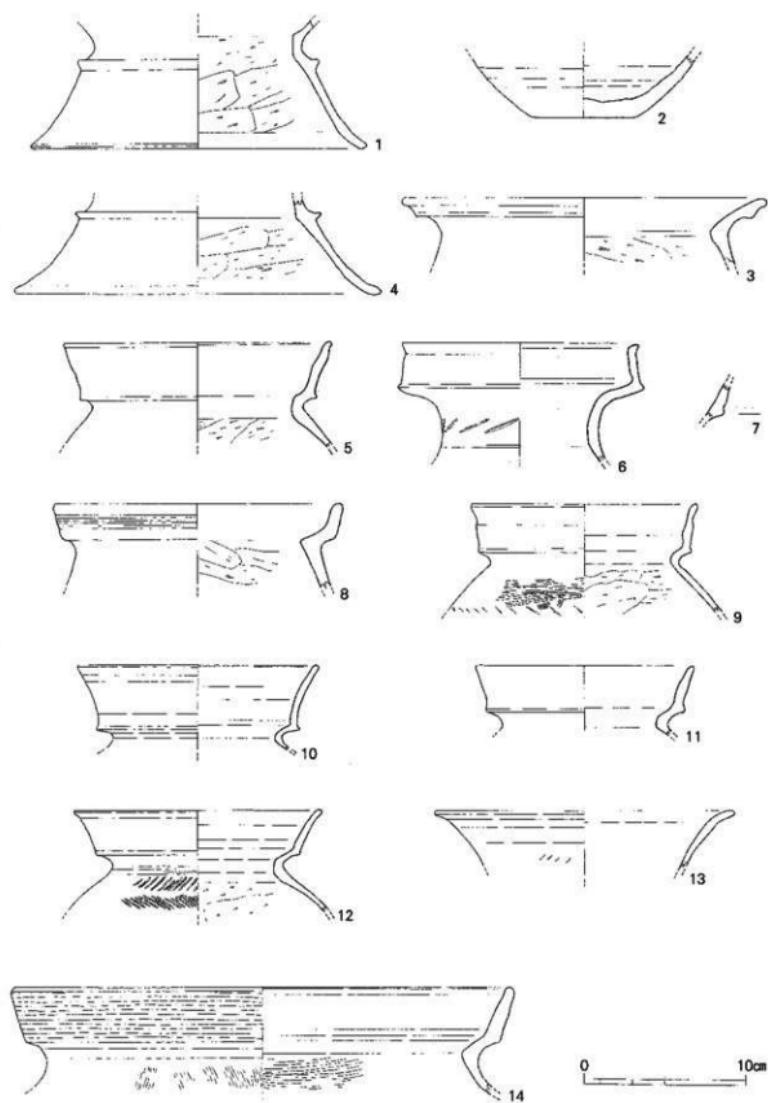


第32図 A8Gr出土遺物②

第34図1は高坏で、坏部内外面及び脚部外面にヘラミガキ調整、柱部外面にハケ目調整後ヘラミガキ調整、柱部及び脚部内部にナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは、外反した後外方に伸び、端部を丸く仕上げている。脚部の広がりは、外反気味に伸び、端部を丸く仕上げている。2は低脚坏で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは、内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。脚部は外反しながら広がり、端部を丸く仕上げている。3は器台脚部で、内面は調整不明であるが、外面にはナデ調整が施されている。脚部は外反気味に広がり、端部を丸く仕上げている。4～6は複合口縁を呈する壺で、口縁部内外面ともにナデ調整を施し、体部内面にはヘラケズリ調整が施されている。4は頸部内面に指頭圧痕が残る。5、6は外面にハケ目調整を施した後、肩部に擬円線、波状文を施している。5は内外面に煤が残っている。4、6は外反気味に立ち上がり、端部を

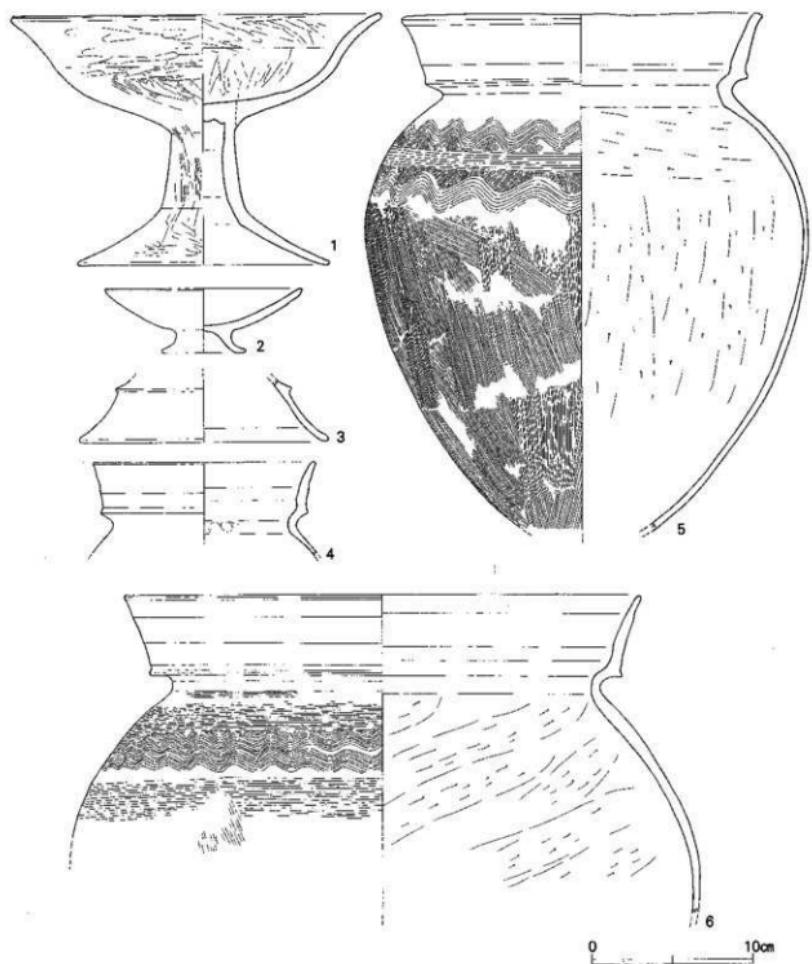
丸く仕上げている。5は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は平坦気味にしている。

第35~37図はCGrで出土した弥生土器である。第35図1、2、4、5は複合口縁を呈する壺で、

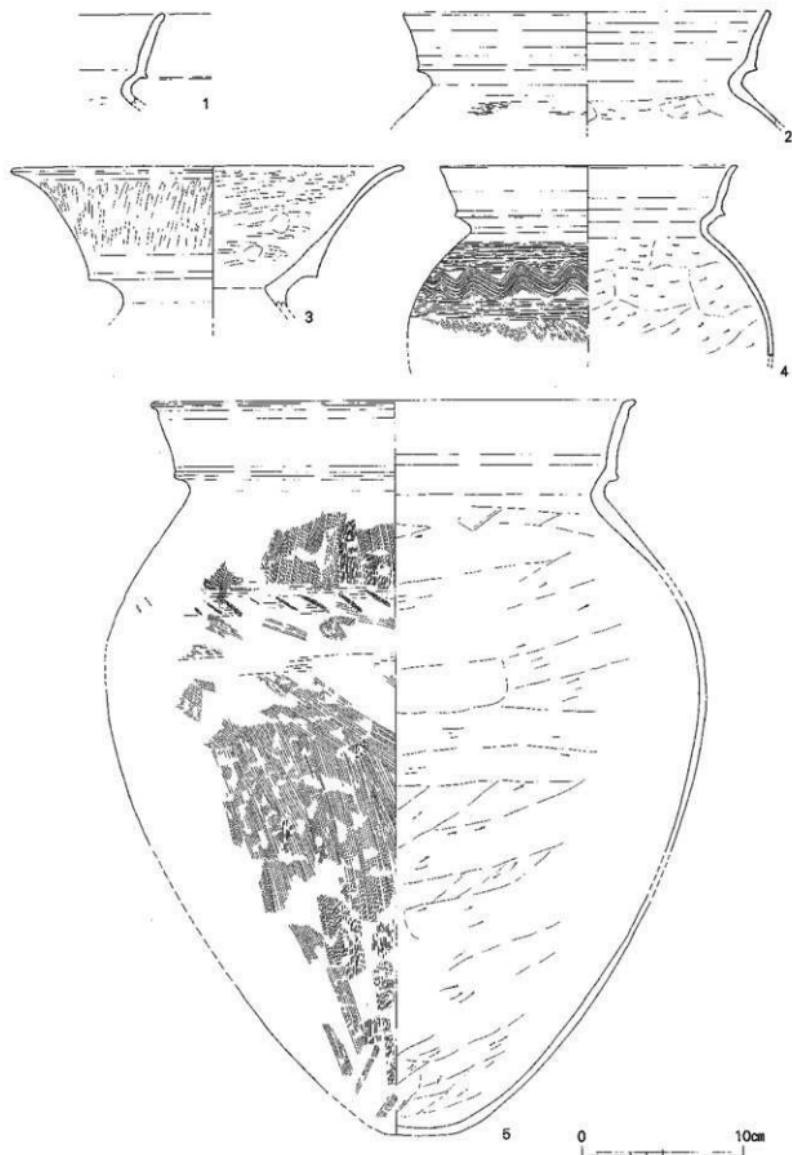


第33図 BGr出土遺物①

口縁部内外面ともにナデ調整を施し、体部内面にはヘラケズリ調整が施される。このうち4、5は外面にハケ目調整が残り、2に擬凹線、4には擬凹線、波状文、5に刺突列点文が施されている。1は外反気味に立ち上がり、やや外傾する。端部は丸く仕上げている。2は外方に直線的に立ち上がった後、外方に直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。4は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。5は上方に伸びた後、外方に直線的に立ち上がり外傾する。端部は丸く仕上げている。



第34図 BGr出土遺物②

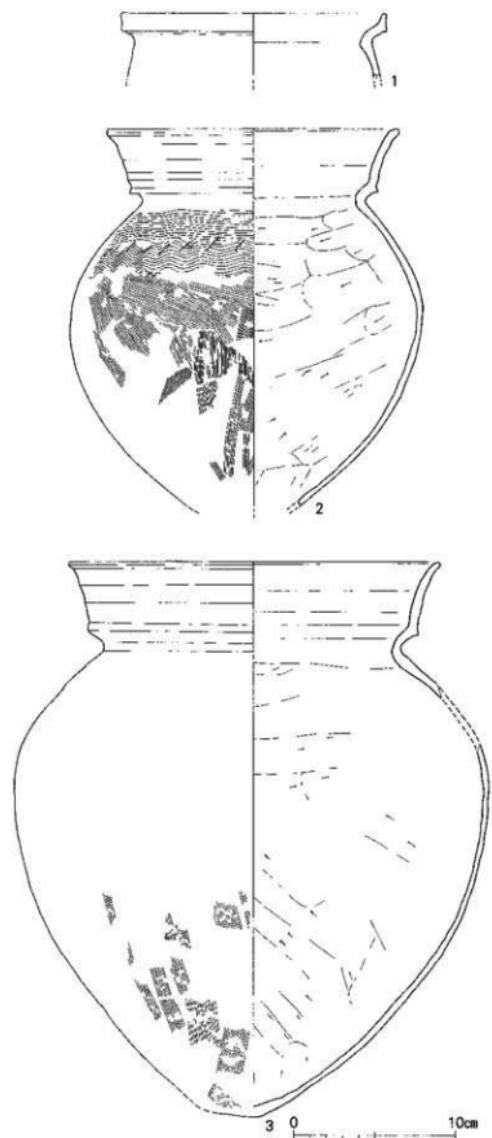


第35図 CGr出土遺物①

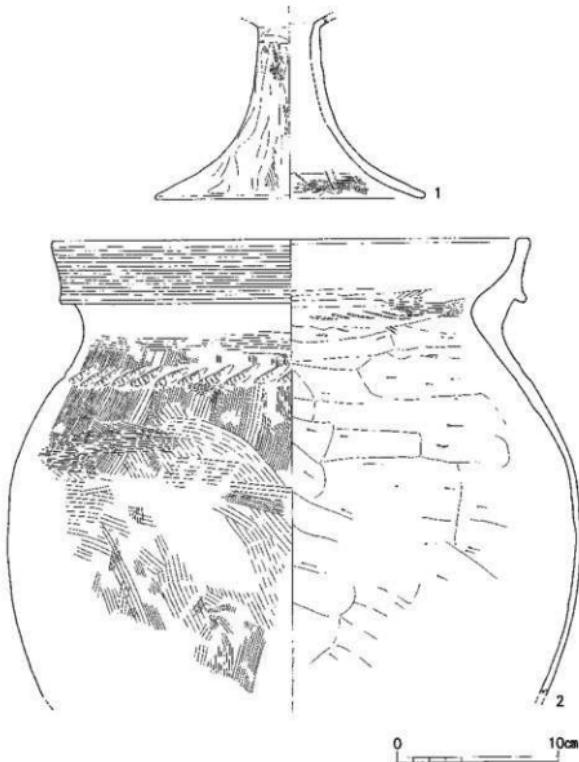
第36図は複合口縁を呈する壺で、口縁部内外面ともにナデ調整を施し、体部内面にはヘラケズリ調整が施される。2、3は外面にハケ目調整が残り、2には擬凹線、波状文、刺突列点文が施されている。口縁部の立ち上がりは、1が上方に立ち上がり、2、3は外反気味に立ち上がる。端部はいずれも丸く仕上げている。

第37図1は高坏脚部で、内面にナデ調整、ハケ目調整、外面にヘラミガキ調整、ハケ目調整を施す。また坏部との接合部にナデ調整が残る。脚部は外反しながら広がり、端部を丸く仕上げている。2は複合口縁を呈する壺で、口縁部は内面にハケ目調整、ヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。一方、体部は内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。口縁部外面に擬凹線、体部外面に刺突列点文を施す。口縁部の立ち上がりは、外方に直線的で、端部には平坦面を作っている。

第38図はE、F、GGrで出土した弥生土器である。1、4、5は壺で、口縁部は内外面ともにナデ調整を施し、1はナデ調整後、口唇部下内面にハケ目調整を施している。体部はいずれも内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施すが、4は内面に指頭圧痕が残る。4、5の肩部には刺突列点文を施し、5には擬凹線が施される。口縁部の立ち上がりは、1は内湾気味に立ち上がった後外傾し、端部に平坦気味な面を作っている。複合口縁を呈する4、5は、4が外方に直線的に立ち上がった後、外傾し直線的に伸び、5は外方に直線的に立ち上がった後外傾する。4、5ともに端部は丸く仕上げている。2は低脚坏で、坏部外面にヘラミガキ調整を施し、その他はナデ



第36図 CGr出土遺物②



第37図 CGr出土遺物③

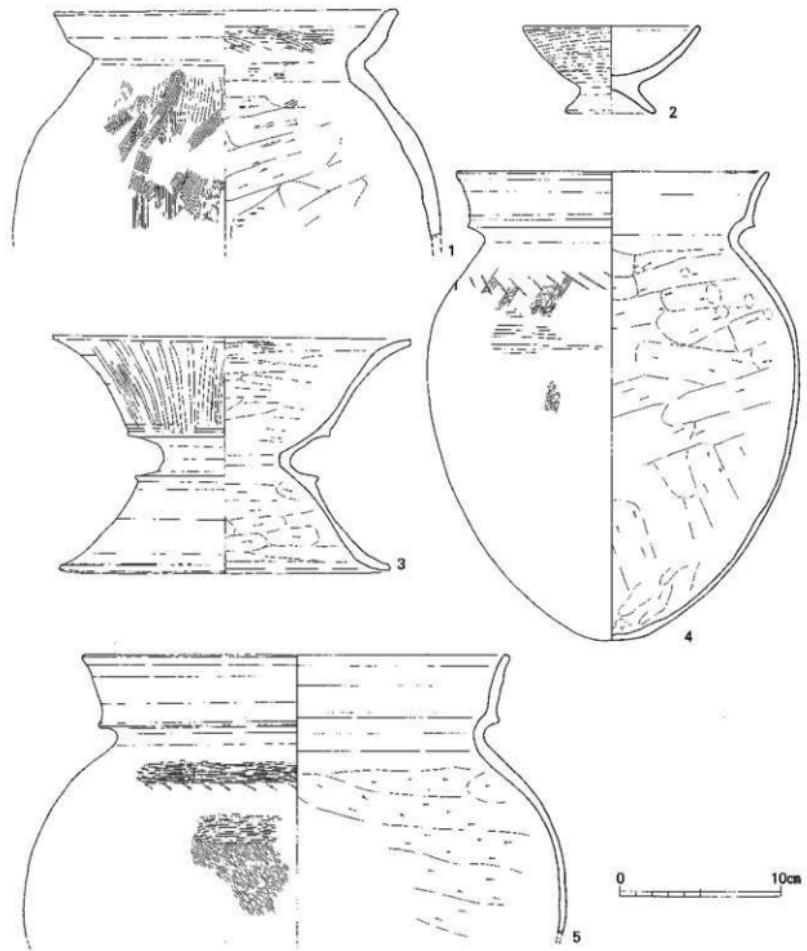
12は内外面ともにナデ調整、9、10は外面にナデ調整を施すが、内面は9にヘラミガキ調整、10にハケ目調整が施されている。1は体部内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施し、底部内外面にヘラミガキ調整を残す。2は体部内外面にハケ目調整を施し、外面に凹線、口縁部端部に刻目文を残す。5は体部内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施し、頸部内面に圧痕が残す。頸部から肩部外面に凹線、羽状文が施されている。7～12は体部内面にヘラケズリ調整を施し、7～11は外面にハケ目調整が残る。7は口縁部端部に擬凹線、刻目文、8は肩部に羽状刺突文、9～11は体部外面に刺突列点文、9～12は複合口縁の外面に擬凹線が残る。6は頸部で、内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。外面には擬凹線、刺突列点文が施されている。6、7、12は断面に粘土の接合痕が残る。3は風化が著しいが、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にハケ目調整が残る。4は口縁部内外面にナデ調整を施し、体部内外面にハケ目調整、ヘラミガキ調整を施す。口縁部の立ち上がりは、1、2は口唇部で外傾し、端部は1を丸く、2を平坦気味にしている。5は頸部から外方に直線的に立ち上がり、端部に平坦面を作る。7は外方に直線的に、8は内湾しながら立ち上がり、両端部を肥厚させる。9はやや外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。10はやや外反気味に伸び、端

調整している。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げ、脚部は外方に直線的に広がり、やや外傾する。端部は丸く仕上げている。3は器台で、受部内外面にヘラミガキ調整、口縁部端部にナデ調整を施し、脚部は内面にヘラケズリ調整、外面及び裾部内外面にナデ調整を施す。受部の立ち上がりは、外方に直線的に立ち上った後口唇部で外反し、端部に平坦面を作る。一方、脚部は外方に直線的に伸びた後外反し、端部を尖り気味にしている。

#### 包含層の遺物

(第39～43図)

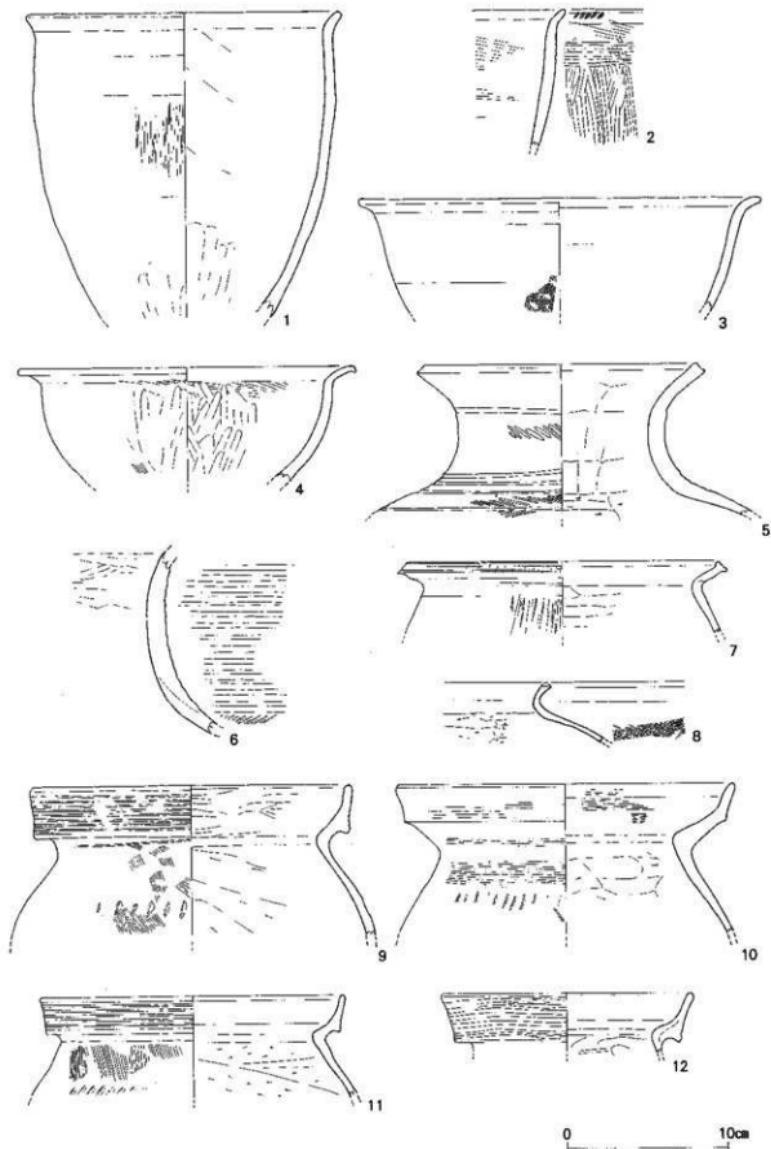
第39～43図は褐色粘質土から出土した遺物である。第39図1、2、5、6～12は甕で、口縁部は、1、2、5、7、8、11、



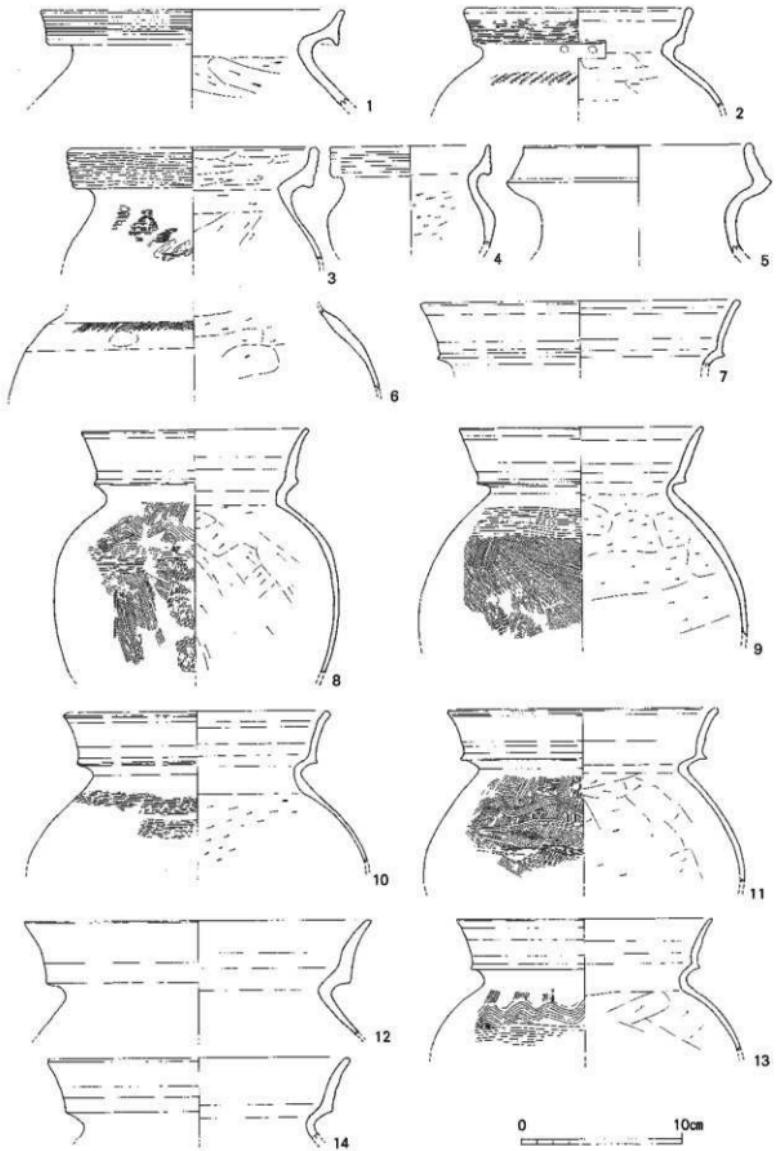
第38図 E・F・G Gr出土遺物

部を平坦気味にしている。11は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。12はやや外反気味に伸び、端部を丸く仕上げている。6は頸部の立ち上がりは、上方に外反しながら立ち上がる。3は口唇部で外反し、外反気味に伸びる。端部は丸く仕上げている。4は口唇部で外方に屈曲した後外反気味に伸び、端部は下方に屈曲して尖り気味に仕上げている。

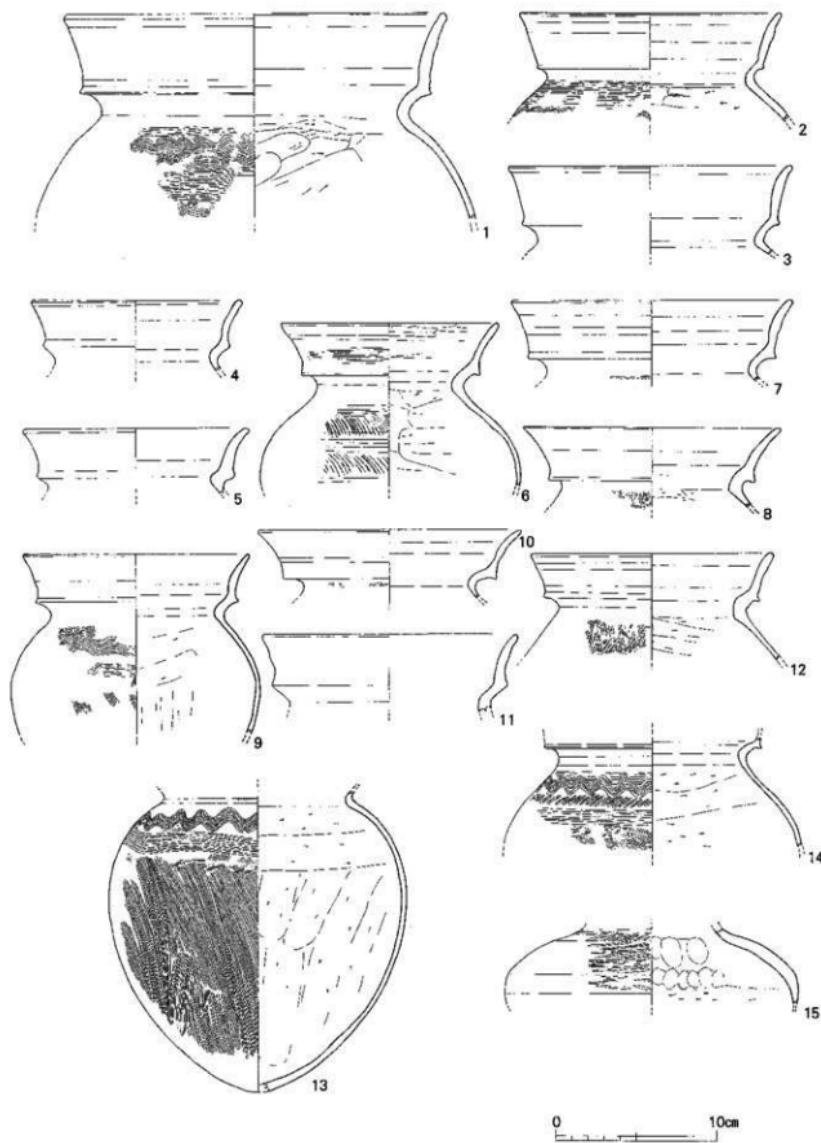
第40図1～14は弥生土器甕で、複合口縁を呈する口縁部は1、2、4、5、7～13は内外面とともにナデ調整を施し、3は内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。1～4は外面に擬凹線が施されている。14は風化が著しいが、内面にナデ調整を施し、外面にはハケ口調整を施している可能性が



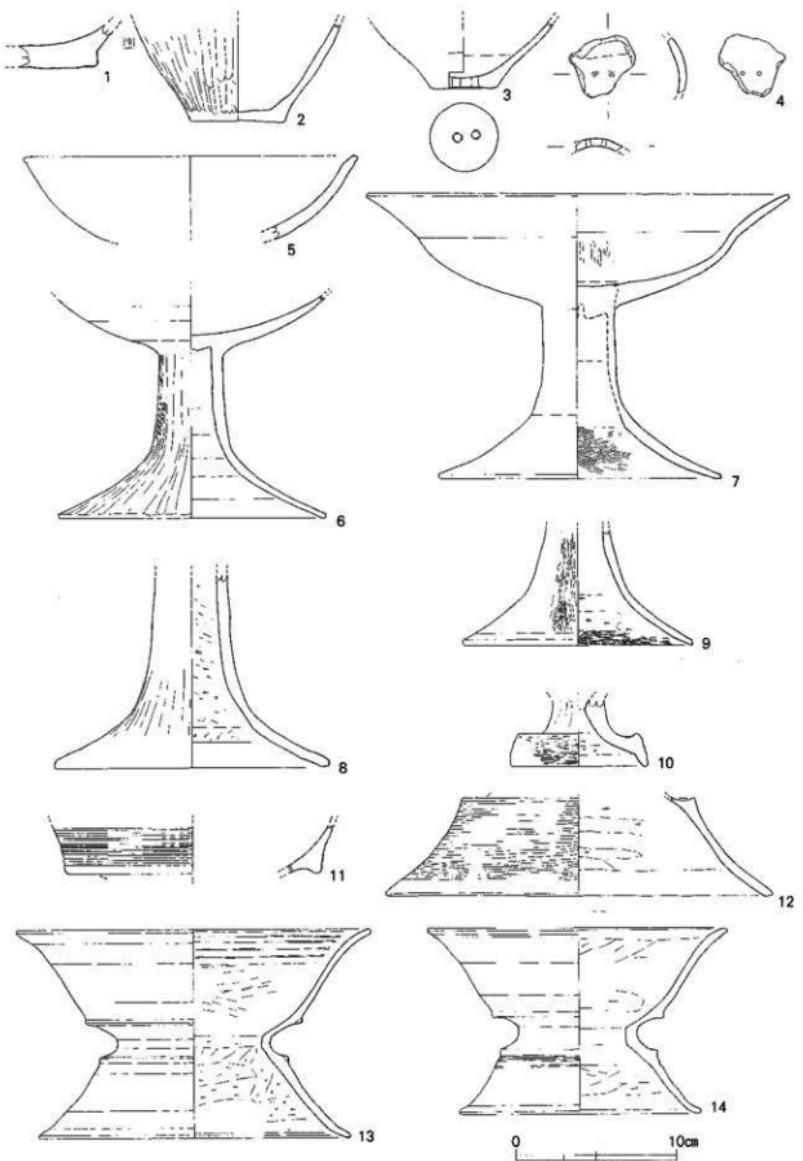
第39図 褐色粘質土 出土遺物①



第40図 褐色粘質土 出土遺物②



第41図 褐色粘質土 出土遺物③



第42図 棕色粘質土 出土遺物④

ある。体部は1～4、6、8～13の内面にヘラケズリ調整を施し、外面は1、4、10、12にナデ調整、3、8、9、11、13にハケ目調整、6にヘラミガキ調整、ナデ調整、指頭圧痕が残る。また2、6に刺突列点文、3に刺突文、8、11、13に波状文、擬凹線、9、10に擬凹線が施されている。口縁部の立ち上がりは、1は外反気味に立ち上がり外傾する。端部は平坦面を作っている。2は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。頭部上に2か所の穿孔が施される。3は内湾気味に立ち上がり端部を丸く仕上げる。4は上方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。5は内側に直線的に伸びた後、上方に反り上がり、端部を丸く仕上げている。7は括れ部分から外反気味に立ち上がる。端部は平坦気味にしている。8、12は外反しながら立ち上がり、8端部を丸く、12は端部を尖り気味に仕上げている。9は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾し、端部は丸く仕上げている。10、11は外反気味に立ち上がりたった後外傾する。端部は平坦気味にしている。13は上方に伸びた後、外反気味に伸び、端部は尖り気味に仕上げている。14は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。

第41図1～15は弥生土器で、1～13、15は壺、14は壺である。複合口縁を有する口縁部は1～5、7～12は内外面ともにナデ調整、6は内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。体部は1、2、6、8、9、12～14の内面にヘラケズリ調整が残り、このうち14にはヘラケズリ調整後、指頭圧痕が施されている。外面は7～10、12～14にハケ目調整、15にヘラミガキ調整を施し、1、2、9、13に擬凹線、波状文、6に擬凹線、刺突列点文、8に波状文、12に刺突文、14に擬凹線、波状文、刺突列点文が施されている。口縁部の立ち上がりは、1は外反気味に立ち上がり、端部を平坦気味にしている。2、12は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾する。端部は2は丸く、12は平坦気味に仕上げている。3は外方に直線的に立ち上がった後外傾する。端部は丸く仕上げている。4は外反しながら立ち上がり外傾する。端部は平坦気味にしている。5、7、9～11は外反しながら立ち上がり、端部は5、7、9は平坦気味に、10は丸く、11は尖り気味に仕上げている。6は外反気味に立ち上がり、端部を平坦気味にしている。8は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。

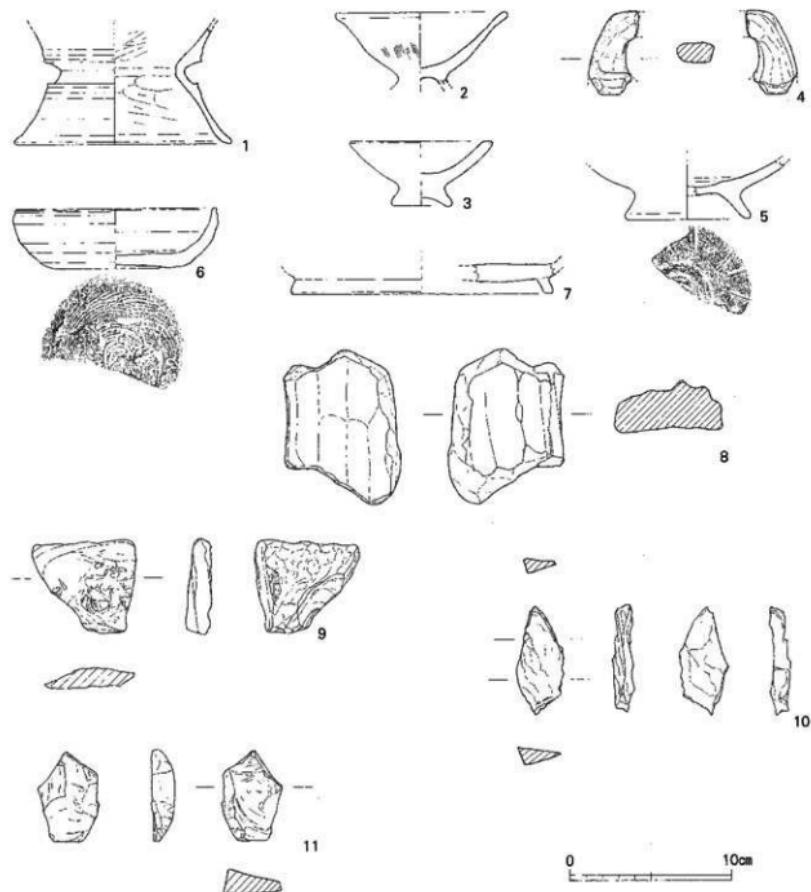
第42図1～14は弥生土器である。1～3は壺の底部で、内面は風化のため調整不明である。1は外面はハケ目調整、ナデ調整を施し、底部に指頭圧痕が残る。2は外面にヘラミガキ調整、底部にナデ調整を施している。3は外面も風化のため調整不明である。器壁の立ち上がりは、1は欠損部が多く詳細不明であるが、2、3は外反気味に立ち上がった後、内湾気味となる。2は底部を2か所穿孔している。4は破片のため詳細が不明であるが、内面にナデ調整が施されている。2か所穿孔している。5～9は高坏である。5は坏部で、風化が著しいが内面にはヘラミガキ調整、外面にナデ調整が施され、口縁部端部をナデ調整している。口縁部は内湾しながら立ち上がった後外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。6は口縁部を欠損している。坏部は内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。一方、脚部は柱部内面にヘラケズリ調整、裾部内面及び裾部端部にナデ調整、外面にヘラミガキ調整を施す。坏部の器壁の立ち上がりは、内湾気味に立ち上がる。脚部の広がりは、外反しながら広がった後、外方に直線的に広がり、端部に平坦面を作っている。7は外面にナデ調整を施す。坏部内面は口縁部内面にナデ調整、内面見込にヘラミガキ調整、ナデ調整を施し、脚部内面は柱部にナデ調整、ヘラケズリ調整、裾部にハケ目調整を施す。円盤充填がされている。口縁部は器體中程から外反気味に広がり、端部を丸く仕上げる。脚部の広がりは外反しながら広がった後外反気味となる。端部は平坦気味に仕上げている。8、9は脚部のみで、坏部は欠損している。8は内面にヘラケズリ調整、外面にヘラミガキ調整を施し、裾部内外面をナデ調整している。脚部の広がりは外反しながら広がった後外反気味となる。端部は丸く仕上げている。9は柱部内面にナデ調整を施している可能性もあるが、その下方にヘラケズリ調整を残す。一方、外面にはハケ目調整を施し、裾部には内面にハケ目調整、

外面及び端部にナデ調整を施している。脚部は外反しながら広がった後、外方に直線的に伸びる。端部は平坦気味に仕上げている。10は器台で、内面にヘラケズリ調整を残す。外面にはヘラミガキ調整、ナデ調整を施し、裾部内外面にナデ調整を施している。裾部外面に擬凹線を施している。脚部は外反しながら広がり、複合口縁状に拡張させている。端部は丸く仕上げている。11は壺または器台の口縁部で内外面ともにナデ調整を施し、外面には擬凹線を残す。12～14は器台である。12は脚部で、内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施し、裾部内外面にナデ調整を施す。外面には擬凹線が施されている。脚部は外反しながら広がった後、外方に直線的に伸びる。端部は尖り気味に仕上げている。13、14は外面にナデ調整を施し、内面は受部にヘラミガキ調整、脚部にヘラケズリ調整を施している。14は口縁部と裾部の内外面をナデ調整し、脚部に擬凹線を施している。受部の立ち上がりは、13は口唇部で外反し、外方に直線的に伸び、14は口唇部で外反気味としている。端部は13は丸く、14は尖り気味に仕上げる。一方、脚部は外反気味に広がった後外傾する。端部は13は丸く、14は尖り気味に仕上げている。

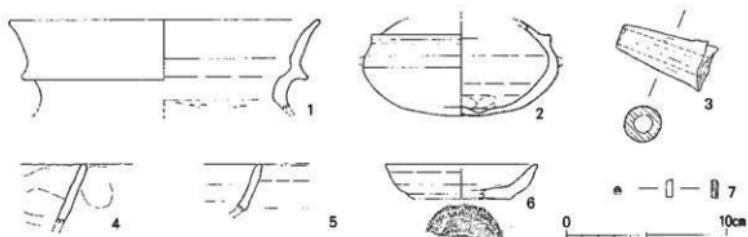
第43図1～4は弥生土器、5～7は須恵器、8は土師器、9～11は石製未製品である。1は器台で、外面にナデ調整を施す。また内面は受部にヘラミガキ調整、脚部にヘラケズリ調整を施し、裾部端部内外面にナデ調整を施している。受部は口縁部を欠損しているが、器壁の立ち上がりは、外方に直線的で、脚部の広がりは裾部で外傾し、端部を丸く仕上げている。2、3は低脚壺である。2は内面にナデ調整、外面にハケ目調整を施すが、口縁部内外面はナデ調整が施されている。一方、脚部内面はナデ調整を施している。口縁部の立ち上がりは、口唇部で外反気味となり、端部を尖り気味に仕上げている。脚部は大部分を欠損しているが、外反気味に広がるものと考えられる。3は内外面ともにナデ調整を施している。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部に平坦面を作っている。一方、脚部の広がりは、外方に直線的に広がる。端部は丸く仕上げている。4は把手で、外面をヘラミガキ調整している。5は高台付壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。壺部は口縁部を欠損するものの、内湾気味に立ち上がる。一方、脚部は外方に直線的に広がり、端部は尖りぎみにしている。6は壺で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整、内面見込にナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。口縁部は内湾しながら立ち上がった後、端部は括れを作り丸く仕上げる。7は高台付壺または皿で、口縁部は欠損している。底部には高台を貼付し、内外面ともにナデ調整を施している。8は移動式壺の炊口付近の破片で、内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整を施す。断面に粘土の接合痕が残る。9、11は碧玉製の未製品である。

#### その他の遺物（第44図）

第44図はその他の土器で、1～3は弥生土器で、1は壺である。口縁部は内外面ともにナデ調整を施し、体部内面にはヘラケズリ調整が施されている。口縁部の立ち上がりは、外傾した後外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。2は壺で、内外面ともにナデ調整を施し、内面見込には指頭圧痕を施す。体部外面に2条の突帯を貼付している。3は注口で、外面にヘラミガキ調整を施す。4は製塙土器で、内外面にナデ調整及び指頭圧痕が施されている。口縁部の立ち上がりは外方に直線的である。5は須恵器の口縁部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは屈曲後内湾気味に伸び、端部は尖り気味にしている。外面炭素付着しており、瓦質土器の可能性もある。6は土師質土器小皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。口縁部の立ち上がりは、内湾気味に立ち上がった後外傾気味となる。端部は尖り気味にしている。7は碧玉製管玉で、両端から穿孔している。



第43図 褐色粘質土 出土遺物⑤



第44図 その他の出土遺物

# 門前遺跡発掘調査に係る花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

## はじめに

本報は、鳴尾市コミュニティーセンター・幼稚園等複合施設建設に先立つ埋蔵文化財調査において委託・実施された、花粉分析業務報告書の概報である。

門前遺跡は、島根県東部の出雲平野北東部に位置する（図1）。本地点は北山山地（弥山山地）山ろくに位置し、現在の集水域も狭い。また歴史的にも北山山地に源を持つ小河川の影響下にあった時期が長いと考えられ、本遺跡から得られた堆積物は、北山山地の比較的狭い範囲での古植生を記録していると考えられる。

## 試料について

図2に示す調査区の位置で、2度に分け、連続試料として合計111試料を採取した。GS-2の上位に、重なりを持ってGS-1が乗る。模式柱状図を図3、4の花粉ダイアグラム中に示す。花粉分析には、採取した111試料の内17試料を用いた。また、下位のGS-2試料No49層準に狭在した木片を、AMS年代測定用試料とした。

## 分析方法及び分析結果

花粉分析処理は、渡辺（1995）に従って行った。プレバラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、イネ科花粉を中村（1974）に従い、イネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

分析結果を図3、4の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を墨塗りスペクトルで、草本花粉・胞子（形態分類を除く）を白抜きスペクトルで示した。花粉化石含有量の少ない試料については、検出できた種類を「\*」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群毎に累積百分率として示した。

また、花粉分析残渣を利用して概査を行った。概査結果を表1に示す。

年代測定にはAMSを用い、OxCal 3.1、INTCAL04の組み合わせで校正計算を行っている。年代測定結果の詳細を表2に示す。

## 花粉分帶

花粉分析の結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

### (1) III带 (GS-2試料No48~25)

スギ属が卓越傾向にあり、さらに増加傾向を示す。この外、マツ属（複葉管東亞属）、アカガ

シ亜属、コナラ亜属、トチノキ属が特徴的に出現する。特にコナラ亜属、マツ属（複維管束亜属）は、微増傾向を示す。木本花粉の割合が高く、草本花粉、胞子の割合は低い傾向にあるが、胞子の割合は増加する。

(2) II带 (GS-1試料No43~26)

スギ属、マツ属（複維管束亜属）が卓越傾向にあるが、スギ属は減少傾向を、マツ属（複維管束亜属）は増加傾向を示す。これらの外、アカガシ亜属、コナラ亜属が特徴的に出現する。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が特に高率を示す外、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科も外の種類に比べ高い出現率を示す。

(3) I带 (GS-1試料No17~1)

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、さらに増加傾向を示す。またスギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属も特徴的に出現する。これらのうち、スギ属、アカガシ亜属は減少傾向を示し、コナラ亜属は安定して出現する。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が特に高い出現率を示す外、イネ科（40ミクロン未満）、アブラナ科、アカザ科ヒュウ科、ヨモギ属、タンボボ亜科がその外の種類に比べ高率を示す。また低率ではあるが、試料No10、7でソバ属が検出される。

### 各花粉帯の年代観について

出雲平野（斐伊川より西側）における花粉分析は、南部、中部において主に行われており、北部での報告は、北西部の出雲大社近辺に限られている（渡辺；2004a, 渡辺；2004b, 渡辺2005）。出雲大社周辺では、渡辺（2005）が外の2報告の内容をまとめた考察をしており、局地花粉帯も統一して示している。このことから、渡辺（2005）との比較を行う。

① III带

今回行った年代測定では、縄文時代晩期に相当する $2,440 \pm 20$ yrBPの年代が得られている。一方花粉組成では、今回の分析結果でスギ属が増加傾向を示し、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属がさほど低率ではないことから、渡辺（2005）のV帶上部からIV帶下部に相当し、縄文時代後期から縄文時代晩期の植生を示していると考えられる。また、中海・宍道湖地域の地域花粉帯を設定した渡辺ほか（2003）のシイ・カシ帯スギ亜帯の前半に対比可能である。渡辺ほか（2003）では、スギ亜帯を縄文時代晩期～古墳時代頃としている。

花粉帯と年代観のズレは、地点間の植生の異なりに由来すると考えられる。また、スギ属の出現率がピークを示す時期が一般的に弥生時代であることから、今回のIII帶は縄文時代晩期から弥生時代にかけての植生を示していると考えられる。

② II带

今回の分析結果では、マツ属（複維管束亜属）の増加とそれに対応したスギ属の減少が特徴である。卓越種がスギ属からマツ属（複維管束亜属）に代わり、アカガシ属、コナラ亜属も残ることから、渡辺（2005）のIV帶に相当する。一方、同様の花粉組成変遷は、渡辺ほか（2003）のシイ・カシ帯スギ亜帯からイネ科花粉帶カシ・ナラ亜帯にかけての特徴を示し、対比可能である。出雲平野での花粉組成の一般的な特徴として、他地域と比べスギ属の減少が遅れマツ属（複維管束亜属）の増加時期に重なること、結果としてアカガシ亜属、コナラ亜属などが一時的な増加を示さず、カシ・ナラ亜帯が不明瞭で、スギ亜帯からマツ亜帯へと移行するように見えることがあげられる。

渡辺（2005）のIV帶は縄文時代晩期～古代にかけての植生を示していると考えられている。一

方、スギ亜帯は縄文時代晩期～古墳時代頃、カシ・ナラ亜帯は古代～中世末頃にかけての植生を示していると考えられる。したがって、今回のⅡ帯はスギ属がピークを示す弥生時代から、中世頃の植生を示していると考えられる。

### ③ I 帯

今回の分析結果ではマツ属（複雑管束亜属）が卓越することから、渡辺（2005）のⅡ帯に相当する。一方同様の花粉組成は、中世末から近世の植生を表す大西ほか（1990）のイネ科花粉帯マツ亜帯に対比可能である。したがって、今回のI帯は中世末から近世頃の植生を示していると考えられる。

## 古環境変遷

以下では、花粉分析結果を基に堆積環境及び周辺の古植生を推定する。また、時間的な変遷を把握しやすいように、古い時期から新しい時期へ向け、花粉帯に従い述べる。

調査地点は北山山地山ろくに位置し、現在は中国山地の碎屑物を運搬する斐伊川の影響を受けていない。過去において、斐伊川の影響を受けた可能性も十分にあるが、ほとんどの時期で堆積物中の多くの花粉が北山山地からもたらされたものと考えられる。

### （1）Ⅲ帯期（縄文時代晩期から弥生時代）

#### ① 堆積環境

腐植質細砂～粘土からなり、西流していた斐伊川の後背湿地内（あるいは山持川流域に広がる湿地内）に位置したと考えられる。

#### ② 近辺の植生

カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属の花粉が検出されることから、湿地内にはスゲ類やアシなどが生育し、干上がるような場所にはヨモギ類が分布していたことが分かる。検出量がわずかであるが、セリ科や、キク科（ヨモギ類を除く）などの草本や、シダ類も混生していたと考えられる。

#### ③ 北山山地の植生

渡辺（2005）ほかで明らかになった出雲平野北西部の分析結果では、マツ属（複雑管束亜属）花粉、アカガシ亜属の出現率が今回の分析結果に比べ高い。また、スギ属、コナラ亜属の出現率は今回の結果の方が高い。また、出雲平野北西部ではさほど顕著に検出されなかったトチノキ属が、今回の結果では顕著に出現する。

出雲平野西部でマツ属（複雑管束亜属）花粉が高率を示す傾向にあることは、クロマツ海岸林が近辺に分布していたことを示唆するものである。またアカガシ亜属が高率を示す傾向にあることは、北山山地に分布した照葉樹林がより近辺まで迫っていたことを示唆すると考えられる。今回の分析結果では、出雲平野西部に比ベスギ属がより高率であったことから、調査地近辺にスギ（スギ林）が迫っていたと考えられる。一方、地形図からは調査地点が現在は小扇状地の末端に位置していることが分かる。扇状地末端部ではゆう水も多くスギの生育に適していることから、このような場所にスギを主体とする林が分布していたと考えられる。また、トチノキも渓谷林・山地河畔林として、扇状地あるいは上流の谷筋に分布していたと考えられ、スギと混淆していた可能性もある。またナラ類は扇状地上あるいは自然堤防上など比較的近くに林を形成したと考えられる。

## (2) III带—II带間

### ① 堆積環境

腐植質中砂～シルトからなり、河川氾濫の影響を頻繁に受けた時期に、後背湿地内（あるいは山持川流域に広がる湿地内）で堆積したと考えられる。

### ② 近辺の植生

花粉の含有量が少なく、胞子の割合が高い。また、相対的に微粒炭の含有量が多い傾向にある。堆積速度が速いために花粉の含有量が少なかったと考えられる。また、胞子や微粒炭は古土壤に由来することが多く、検出された胞子や微粒炭の多くは古土壤の二次堆積である可能性が示唆される。

この層準ではハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属花粉が特徴的に検出され、湿地内でのハンノキ林の分布や、ニレ科の樹木からなる自然堤防林の分布が推定される。

## (3) II带期（弥生時代から中世以前）

### ① 堆積環境

腐植質粘土からなり、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で検出されるなど、水田内の堆積物であると考えられる。

### ② 近辺の植生

前述のようにイネ科（40ミクロン以上）花粉が極めて高率を示し、オモダカ属、セリ科など、水田雑草となる種類の花粉も増加する。これらのことから、調査地点近辺には水田が広がっていたと考えられる。

### ③ 北山山地の植生

弥生時代以降、中世までの時期であり、出雲平野の開発が進んだ時期でもある。スギ属花粉の出現率はこの時期初頭に最も高率を示し、その後減少する。同時にイネ科（40ミクロン以上）花粉も最も高率を示すが、その後は安定した出現率を示している。スギ属花粉の減少に対し、イネ科（40ミクロン以上）花粉が増加を示さないことから、スギ林の縮小が水田開発に伴ったものではなかったものと考えられる。したがって、急激に広がった水田は、前の時期までに調査地点近辺に分布していた湿地を開墾したものであると考えられる。一方、スギ属の減少に呼応して増加するマツ属（複維管束亜属）花粉は、開発に伴うアカマツ二次林の拡大と、いわゆる「里山」としての維持管理を示唆すると考えられる。スギやトチノキの生育していた扇状地あるいは上流の谷筋へと除々に開発が進み、それまで分布していたこれらの木々がアカマツに置き換わっていったと考えられる。

出雲平野北西部の花粉組成と比べた場合、今回の結果ではⅢ帶同様にコナラ亜属花粉が高率である。この傾向は続くⅠ帶でも認められる。さらに出雲平野南東部の三田谷Ⅰ遺跡でも今回と類似した花粉組成が認められており（渡辺、2000）、北西部と東部（この場合、北山山地、中国山地縁辺を含む）での差異と考えられる。北西部のマツ属（複維管束亜属）花粉の多くがクロマツ海岸林に由来し、コナラ類を伴わなかった事に対し、東部ではアカマツ林に山米しこナラ類を多く混淆していた結果であると考えられる。

## (4) I带期（中世末から近世）

### ① 堆積環境

I帶層準同様に腐植質粘土からなり、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で検出されるなど、水田内での堆積物が連續していると考えられる。

## ② 近辺の植生

前述のようにイネ科(40ミクロン以上)花粉が極めて高率を示し、オモダカ属、セリ科など、水田雜草となる種類の花粉も増加する。これらのことから、調査地点近辺には水田が広がっていたと考えられる。一方で試料No10、7でソバ属花粉が検出されることや、試料No1でアブラナ科花粉が検出されること、裏作としてソバやナタネを栽培していた可能性を示唆する。ただし、ソバには畦などを利用した栽培形態もある。

## ③ 北山山地の植生

マツ属(複維管束亞属)の増加傾向が続く。一方で、スギ属が減少傾向を示すほか、アカガシ亞属も減少傾向を示している。開発行為が扇状地から山地にまでおよび、アカマツ主体でナラ類、シデ類を伴う「里山」が広がっていたと考えられる。一方で、スギ属花粉の出現率は10%までしか減少していない。Tsukada(1981)によれば、スギ林とは呼ばないまでも、スギが近辺で生育していたと考えられる値である。

## まとめ

- (1) 得られた花粉組成変遷をI～III带の局地花粉帯に分帯した。
- (2) 設定した3花粉帯の示す時期を、AMS年代測定値及び既知の資料との対比により行った。それぞれの花粉帯が示す時期は、おおよそ以下の通りである。
  - III带期(縄文時代晩期から弥生時代)、II带期(弥生時代から中世以前)、I带期(中世末から近世)
- (3) 花粉帯毎に、堆積環境、近辺の植生、北山山地の植生として考察を加え、古植生変遷について述べた。特筆すべき事柄を以下に示す。
  - ① 近辺の堆積環境は、後背湿地から氾濫源的な環境を経て水田へと変化した。
  - ② 近辺の植生は、スゲ類、アシなどの繁茂する湿原環境から、水田へと変化する。また、湿原の時期に、ハンノキ林が分布した可能性がある。
  - ③ I带期では、水田の裏作としてナタネやソバが栽培された可能性がある。
  - ④ 北山山地山ろくでは、縄文時代晩期に既にスギ林が分布していた。また、トチノキもこれに混淆していた可能性がある。
  - ⑤ 出雲平野西部の特徴として、おそらくクロマツ海岸林に由来する、マツ属(複維管束亞属)花粉の卓越傾向が明らかになった。一方東部ではコナラ亜属j花粉の割合が高く、アカマツとナラ類の混淆する「二次林：里山？」が特徴的に分布していたと考えられる。
  - ⑥ マツ属(複維管束亞属)花粉の卓越する中世末から近世の時期でも、北山山地にはスギが生育していた可能性がある。

## 引用文献

- 大西郁夫・下場英樹・中谷紀子(1990)穴道湖湖底下完新統の花粉群、島根大学地質学研究報告、9, 117-127.
- Tsukada Matsuo (1981) *Cryptomeria japonica* D. Don L. Pollen dispersal and logistic forest expansion. *Jap. J. Ecol.*, 31, 371-383.
- 中村 純(1974)イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13, 187-197.
- 渡辺正巳(1995)花粉分析法、考古資料分析法、84, 85. ニュー・サイエンス社。

- 渡辺正巳（2000）三田谷I遺跡c区発掘調査に係る花粉分析、三田谷I遺跡－塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、65-70、出雲市教育委員会。
- 渡辺正巳・佐伯純也・平木裕子(2003)日久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果、鳥取地学会誌、7、1-9.
- 渡辺正巳（2004a）出雲大社近辺の古植生、出雲大社境内遺跡、379-384、大社町教育委員会。
- 渡辺正巳（2004b）五反配遺跡発掘調査における自然科学分析、五反配遺跡 古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書、15-22、島根県教育委員会。
- 渡辺正巳（2005）五反配遺跡発掘調査における自然科学分析、五反配遺跡（平成16年度調査）古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書、28-38、島根県教育委員会。

表1 概査結果

GS-1						
試料No	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	○	△×	○	○	△×	○
7	○	△×	△	○	△×	○
10	○	△×	△	○	△×	△
17	○	△	△	○	△×	○
26	○	△	△	○	△	○
35	○	△	○	○	△×	○
39	○	△×	○	○	△×	○
43	○	○	△×	△	△	○
51	△	○	△×	△	△×	△
59	△	△	△×	△	△×	△
62	△	△	△×	△	△×	△

GS-2						
試料No	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オパール
2	△	△	△	△	△×	△×
9	△	△	△×	△	△	△
16	△	△	△×	△×	△	○
25	○	△×	△×	○	△×	○
32	○	△×	○	○	△×	△
42	○	△×	○	○	△×	△×
48	○	△×	○	○	△×	△×

凡例 ○ : 十分な数量が検出できる ○ : 少ないが検出できる △ : 非常に少ない

△× : 極めてまれに検出できる × : 検出できない

表2 AMS年代測定結果

試料No	測定年代(yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ (yrBP)	曆年較正用年代(yrBP)	曆年代*(cal y.)	測定番号(PLD-)
IM-1	2,485±25	-27.78±0.13	2,440±20	2,440±22	BC750-680 BC670-640 BC600-400	6089

\*: 2 sigma, 95% probability

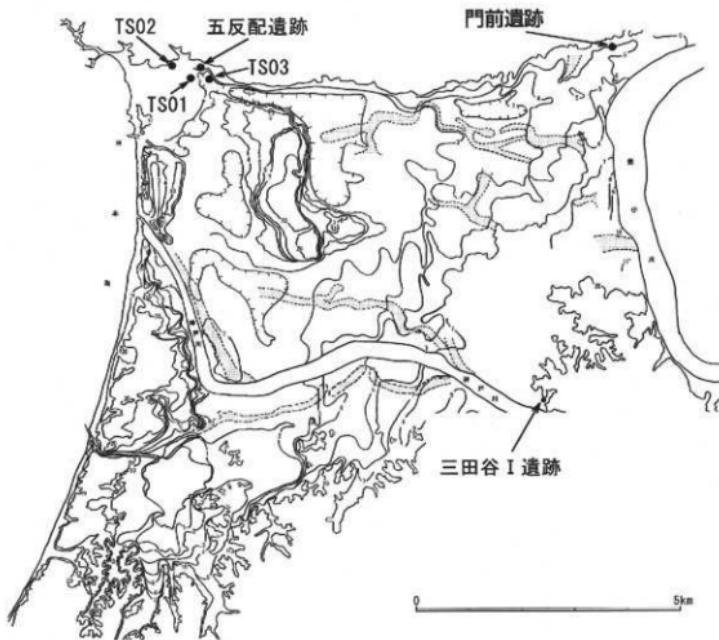


図1 出雲平野の地形と遺跡の分布

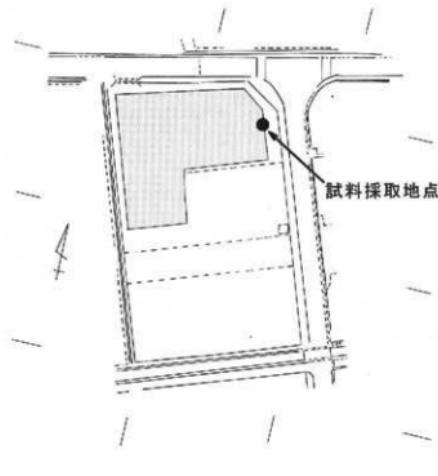


図2 試料採取地点

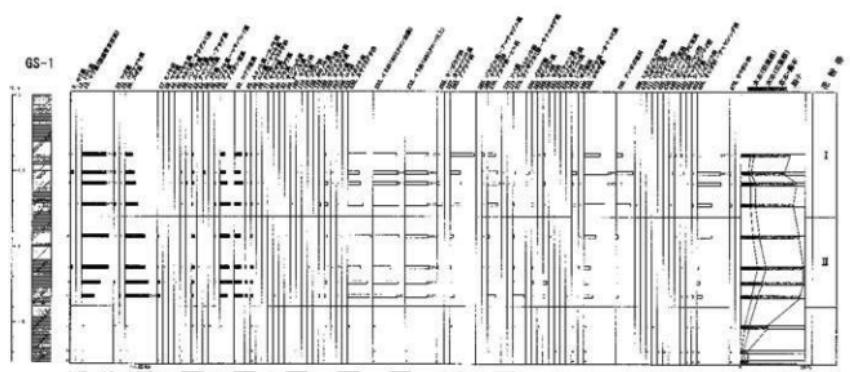


図3 GS-1の花粉ダイアグラム

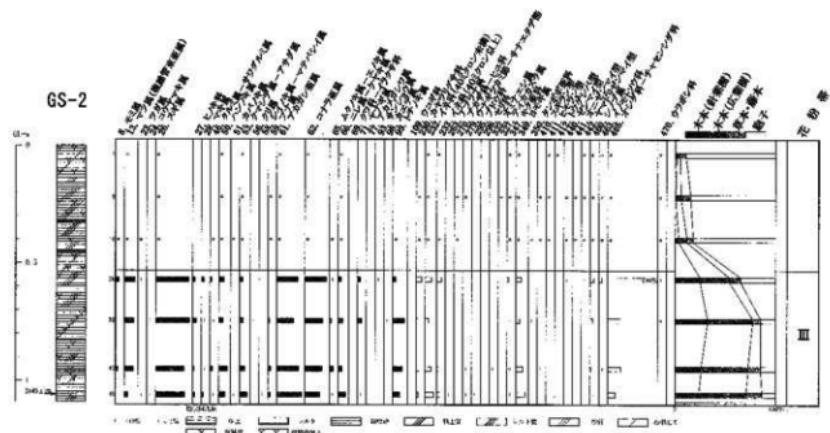
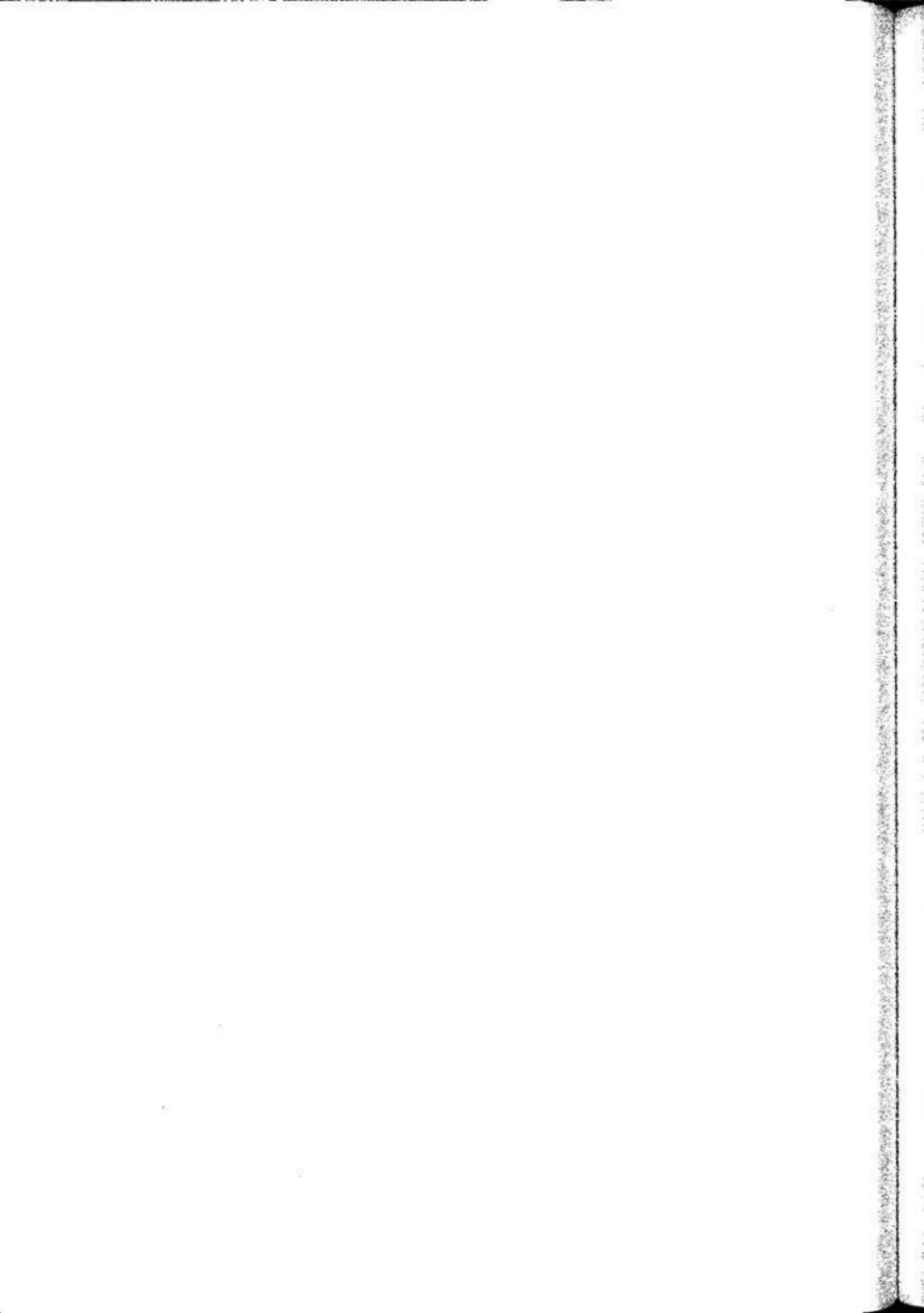


図4 GS-2の花粉ダイアグラム

# 図版





B7Gr SK03検出状況



B7Gr SK03土層断面



B7Gr SK03完掘状況



B7Gr SK03遺物出土状況



B7Gr SK03遺物出土状況



B7Gr SK03遺物出土状況



C7Gr SK01検出状況

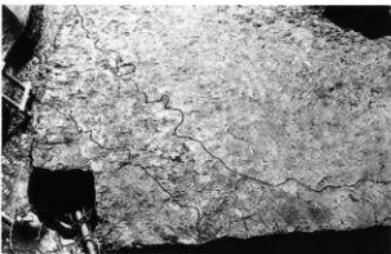


C7Gr SK01土層断面

## 図版2



C7Gr SK01遺物出土状況



A8Gr SD01検出状況



A8Gr SD01土層断面



A8Gr・B8Gr SD01遺物検出状況



A8Gr・B8Gr SD01遺構完掘状況



A8Gr・B8Gr SD01遺構完掘状況



A1Gr 第26図1出土状況



A1Gr 獣骨出土状況



A1Gr 獣骨出土状況



A5Gr 第27図15, 16出土状況



A5Gr 第28図3出土状況



A5Gr 第28図5出土状況



A6Gr 第28図10出土状況



A6Gr 第28図12, 13出土状況



A6Gr 第29図4, 5出土状況

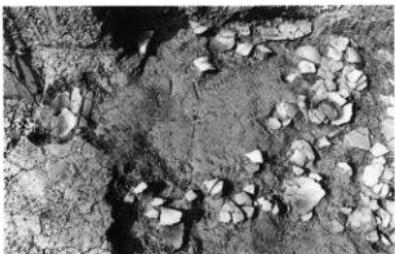


A7Gr 第29図7~9出土状況

## 図版4



A7Gr 第30図2～6出土状況



A8Gr 第30図8～10出土状況



A8Gr 第31図1～11出土状況



A8Gr 第32図1, 2出土状況



B3Gr 第33図10～14出土状況



B6Gr 第34図4～6出土状況



B6Gr遺物出土状況



C3Gr 第35図1出土状況

図版 5



C4Gr 第35図 3 出土状況



C4Gr 第35図 4, 5 出土状況



C5Gr 第36図 1, 2 出土状況



C5Gr 第36図 3 出土状況



D1Gr 遺物出土状況



F2Gr 土器群 1・2 出土状況



F2Gr 第38図 2～4 出土状況

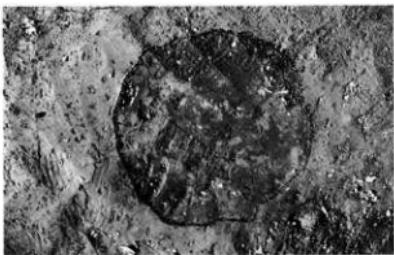


G2Gr 第38図 5 出土状況

## 图版6



G3Gr 遗物出土状况



B4Gr SK01檢出状况



B4Gr SK01土層断面



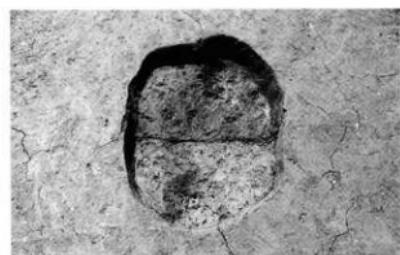
B6Gr SK01土層断面



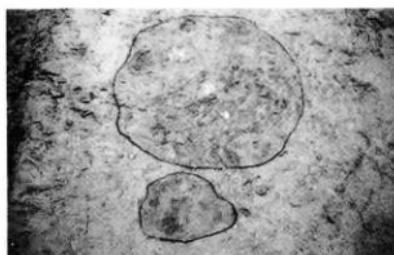
B6Gr SK01 · P02完掘状况



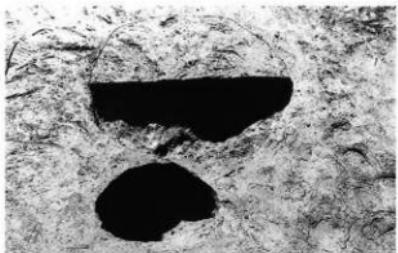
B7Gr SK01土層断面



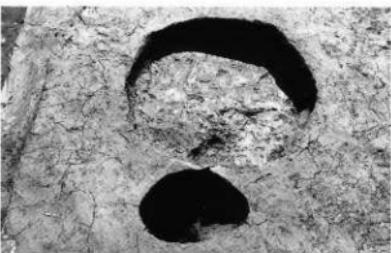
B7Gr SK01完掘状况



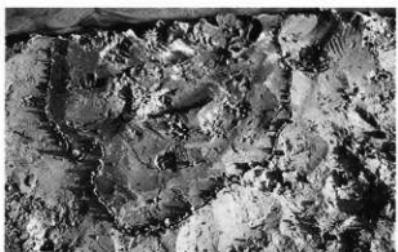
B8Gr SK01 · P05檢出状况



B8Gr SK01土層断面



B8Gr SK01完掘状況



C5Gr SK01検出状況



C5Gr SK01土層断面



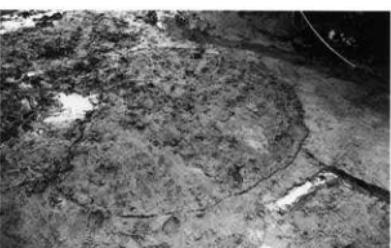
C6Gr SK01検出状況



C6Gr SK01土層断面



C6Gr SK01完掘状況

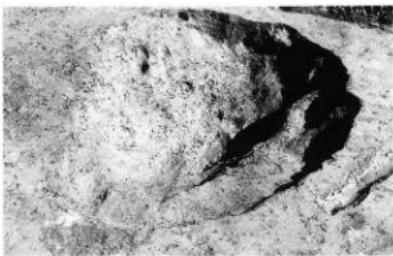


C6Gr SK02検出状況

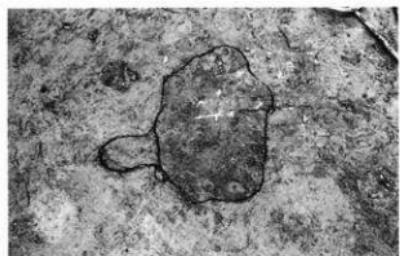
## 图版 8



C6Gr SK02土層断面



C6Gr SK02完掘状況



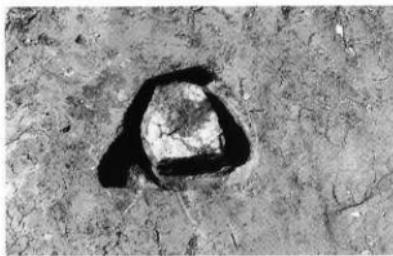
A7Gr P01検出状況



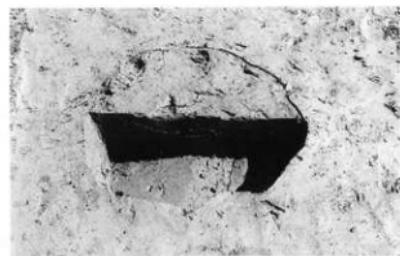
A7Gr P01土層断面



B6Gr P01検出状況



B6Gr P01遺物出土状況



B8Gr P01土層断面

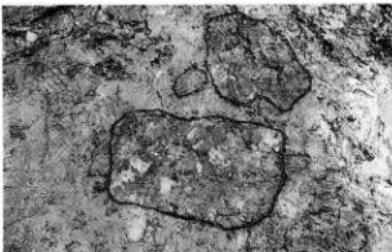


C5Gr P01検出状況

図版 9



C5Gr P01土層断面



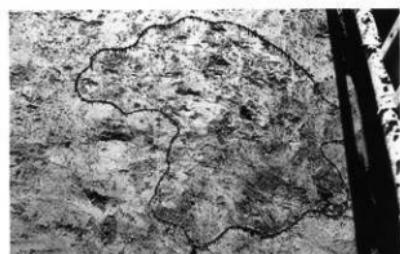
C5Gr P02・P03・P04検出状況



C5Gr P02土層断面



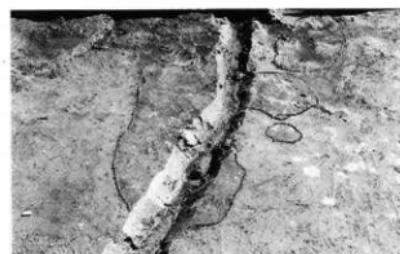
C5Gr P02・P03・P04完掘状況



B5Gr SX01検出状況



C4Gr SX01土層断面



C7Gr SX01・P03・P04・P05検出状況



A4-A5堆積土状況

## 图版10



A5-A6堆積土状況



A6-A7堆積土状況



B9杭付近 堆積土状況



D5-D4堆積土状況



D6-D5堆積土状況



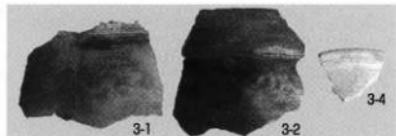
D7-D6堆積土状況



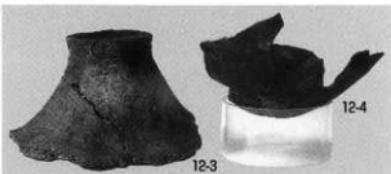
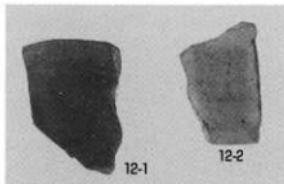
D8-D7堆積土状況



D9-D8堆積土状況



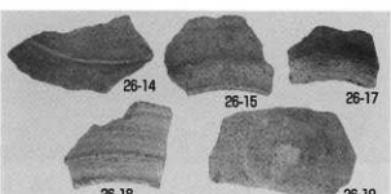
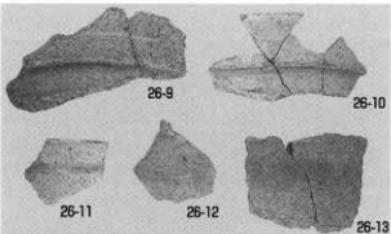
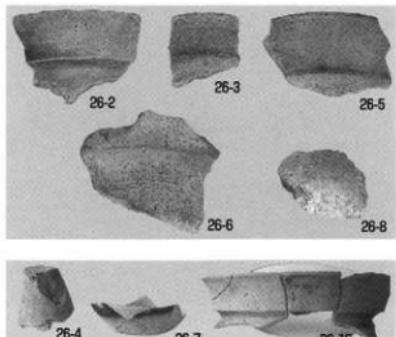
試掘トレンチ出土遺物



布堀建物跡  
(B7Gr・SK03・C7Gr・SK01) 出土遺物



C7Gr SX02出土遺物



A1・2・3Gr出土遺物